

---

# 春隣

桜木結実

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春隣

### 【Zコード】

Z7902A

### 【作者名】

桜木結実

### 【あらすじ】

陽光を都とする大宋の国で、勢力を伸ばしている橘氏。ある夜、橘の屋敷で男が殺された。なぜ男は殺されたのか、そして橘でなにが起こったとしているのか……。さまざまな人間関係が絡まったくミステリーです。

## 第一話 不安の萌芽（1）

ねえ。知つている？

人間の運命を紡ぐ女神が、天上にいるんですって。あたし達の運命も、その女神が紡いでいるのかしら。あたし達、どういう運命に紡がれているのかしら……。

「お姫さん、その怪我はどうなさつたんです？」

都で急激に勢力を伸ばしている橘家惣領の妹姫、雪菜のおでこには、ミニズバレが二本浮いていた。

「ちょっとね」

橘家の家臣、広瀬和馬の質問に、雪菜はおでこを手で押さえながら、下を向いて答える。

「惣領殿が上院の御所から戻られたら、追求されますね」

雪菜の侍女、藤枝菊花の言葉に雪菜は顔を上げた。

「菊花も黒川さんも、余計なこと言わないでよ」

「言いませんよ。俺だって、惣領殿はこわいですから」

雪菜の護衛を勤めている黒川泰史が、小声で言つ。

「なんだか意味深だなあ。直也が面白くなさそうにしてますよ」

「俺は、別に……。それより、惣領殿は討伐隊の件で御所に行かれていらっしゃるんですよね。上院から、いいお返事はいただけるでしょうが」

和馬に言われて、慌てて話を変えた若い男は、水越直也である。

雪菜とは、ほとんど他人というくらい遠い親戚にあたる。

「難しいだろなあ。上院も一体どのようなおつもりなのか、全く分からんし」

和馬の言葉に、直也もがっかりしているようだ。

大栄と呼ばれるこの国は陽光を都とし、大山脈を背後にかかえ、貴族を中心として長い間安定した繁栄を誇っていた。だが、二十年ほど前から山脈を越えて蛮族が侵入しはじめ国土を荒らすようになり、九年前にはとうとう大規模な討伐隊が制圧に向かつた。その総指揮官が雪菜の父だつたのだ。それにより、一度は蛮族の動きも沈静化したのだが、近年再び侵入が活発化し、また討伐隊が組まれることが決定した。雪菜の兄である将一は、その総指揮官を願い出ているのだが、決定権を持つ上院がなかなか任命しようとしない。橋の内部では、そのことに対する苛立ちがつのり始めていた。

「直也つてば！あたしのケガよりも、討伐隊の方が気になるわけ？」

「だつて、雪菜は言う気がないんだろ。聞くだけ無駄じやないか。

大体、問題の大きさが違いすぎるだろ」

「そういうもんじやないの！直也つてば、全然あたしの気持ちを分かつてくれないんだから！」

「そうそう。こうじう時は大げさなくらい心配すれば、お姫さんも喜ばれるのになあ」

「そう！そうなの！やつぱり広瀬さんは大人だわ。よくわかつてる！」

「おでこを縁に染めて、なに言つてんですか。それで一人の世界をつくつても、おかしいだけですよ」

泰史の言葉に、雪菜はむつとする。直也と菊花は声を抑えて、笑つていた。

雪菜のおでこは傷に効く薬草を塗つてているせいで、薄い草色に染まつているのだ。

「にぎやかですな。渡部ですが、お邪魔してもよろしいでしょか」「はーい、どうぞ」

廊下から聞こえた、低くてよく通る男の声に、雪菜は返事をする。「失礼いたします」

障子が開き、脇に小箱を抱えた男が入ってきた。渡部吉住。精悍

な印象の男だ。

「こんなにちは、渡部さん。『無沙汰しています』

「これは、水越殿。お元気そうでなによりです」

傍流とはいえ橘の一族である直也に、吉住はいつも丁寧な口調で接している。

「藤枝さん、これは真砂の土産だ。よかつたら、みんなに出してやつてくれ」

「いつもありがとうございます。早速、お茶を入れてきますね」

菊花はすぐに立ち上ると、箱を持って部屋を出て行つた。

「久しぶりだな、渡部。真砂はどうだつた？」

真砂とは、岩塩湖がある辺境の地名である。橘はここで取れる良質の岩塩に、国で最も高貴な上院の紋をつけてブランド化し、都だけでなく国中に流通させて莫大な利益を上げていた。

吉住はその総括長をしていて、都と真砂を往復することが多い。

今も、真砂から帰ってきたばかりだ。

「広瀬はずいぶん長い間、真砂に行つていないよな。以前とはだいぶ変わつたぞ」

「そうだらうなあ」

「そういえは、真砂で原口といつ男に会つたぞ。笠原村の出身だと言つていた。昔、広瀬が領主をしていた所だろ？ 知つているか？」

「原口？」

和馬の声が、途端に不機嫌になる。

「原口は岩塩の第一倉庫長をしていてな。お前の話をしたら、笠原村の復興のために一緒に働いた、と話していたぞ」

「原口が復興のために？ よくもそんなことが言えたもんだ」和馬の強い口調に、雪菜は驚いた。和馬がこんな言い方をすることは、滅多にない。直也もびっくりした顔をしている。

「なんだ、穢やかじやないな。名波にでも乗つて、落ちついてこい。そういうや、名波の調子はどうだ。大分慣れたか？」

名波とは、和馬が最近手に入れた馬である。丈夫で足も速く、勘

がいい。乗り手の和馬と息がぴったりだつた。和馬は毎晩、屋敷のはずれにある馬小屋まで様子をみにいくほど、名波を可愛いがつていた。

「そりや もう、絶好……」

「雪菜！雪菜はどこだ！」

部屋の中には和馬の声を遮つて、庭から大声が聞こえてくる。

「……」

その声を聞いて、雪菜は固まつた。

「ばれたみたいですよ」

「あーあ、ついてないなあ」

そう呴いた途端、背が高く、体格のいい男が部屋に現れた。雪菜の兄であり、橘家惣領の将一である。

## 第一話 不安の萌芽（2）

将一は大きな足音を立てて中に入り、雪菜の前に座った。雪菜の周りにいた者たちは、慌てて廊下近くに移つていいく。するとまた障子が開き、顔立ちの整つた男が入ってきた。

「貴船殿、これはいつたい何事ですか」

「どうやら、雪菜が御所にまで噂が届くような何かをやらかしたらしい」

「……」

直也が沈黙し、吉住が眉を寄せた。

「そりや、まずいですな」

和馬は、どことなく面白がつてこむよつだ。

「お前たちは部屋から出でていろ」

貴船殿と呼ばれた男の命令に、全員が従つ。

直也は心配そうに雪菜を見ていたが、和馬に促され、一緒に部屋から出て行つた。

それを待つていたかのように将一が声を低め、雪菜に質問をする。「おまえ、神原の次女と街で取つ組み合いをしたといつのは、本当か」

「さすが、お兄さま。お耳が速い」

「ところことは、本当なんだな」

雪菜は、首を縦に振つた。

「雪菜……。原因はなんだ。なぜ、よつによつて今、神原と争いを起こす」

神原とは古くから御所の警護を担つてきた中流貴族である。橘の台頭によりその地位が脅かされ始め、現在では犬猿の仲となつていい。討伐隊の総指揮官が決まらない今、余計なことで神原に足を引つ張られたくない、というのが将一の本音だ。

「……」

「言いなさい、雪菜」

静かに言つ時の将一は、本氣で怒つてゐる。

「お兄さま、氣落ちしないで聞いてくださいる?」

「言つてみなさい」

「神原の由美がね、お兄さまの赤い着物を見たらしくて、さすが成り上がり者だ、趣味が悪いと言つたの」

「そうか。若い女には受けが悪い着物なのかもしけんな

「あんな着物を着てゐるから、歌い女にすら相手にされないんだつて言われた」

「……」

将一が神原専属の歌い女を口説いてゐるのは、都中で知らない者はいないほどの有名な噂だ。

「ね? 腹がたつでしょ?」

「うーむ……まあ、愉快な気分ではないな」

そう言いながらも、将一の顔は引きつっている。

「あたしは腹がたつたわ。それまでもね、あたしのことがザルとか、育ちが悪いとか散々言つてきたのよ」

「なに! あの女、そんなことを言つのか」

「でもね、あたし、我慢して相手にしてなかつたの」

「うむ」

「だけどね、お兄さまの悪口まで言つられて、あたし、我慢できなくなつちやつて。だつて、橘の龍とまで言われる、あたしの血腫のお兄さまなのに……」

雪菜はその時のことを思い出し、悔しさで涙が滲んできた。

「そうかそうか、可哀想に。ひどい目にあつたな。よしよし、雪菜は悪くないではないか。なあ?」

そう言つて将一は、下を向いて涙ぐむ雪菜の頭を撫でた。

「将一。説教はどうなつた」

「なあに、また上院になにか言われたら、橘は女子までもが勇ましいのです、とても答えればよい

「そのように甘やかすから、わがまま放題の山ザルなどと言われるのだ。よい、私が諭そつ。雪菜、こちらを向きなさい」

「この男の本名は橘英樹といつ。将一と雪菜の従兄弟にあたり、親族以外からは故郷の地名、つまり「貴船」と呼ばれている。英樹は一族の中でも将一の右腕として大きな存在感を示しているので、雪菜に大甘な将一に代わって説教ができる、数少ない一人なのだ。

「おいおい、わがまま放題とは言われていないぞ」

「これのどにが、わがまま放題でないというのだ。よいが、雪菜。おまえは現在の橘があるのは、何故だと思つておる」

「お父さまが蛮族制圧の功績をたてられたので、廻中の参内が認められたからです……」

「そうだ。それを足がかりとし、岩塙の利益で軍備を増強した結果、橘は貴族達が面とむかつて馬鹿にできないまでに大きくなつた。それも叔父上亡き後、将一を中心とした家臣一同が、血の滲むような努力をしたからである。だが、貴族の心の内までもが変わつたわけではない。それは雪菜とて身に染みて分かっているはずだ」

「はい……」

「その皆の努力を、惣領の妹姫たるおまえが台無しにするとは、なにじとだ。貴族どもは、何を口実に足を引っ張るのか分からんのだぞ。それすらも理解できぬのか」

「……」

「英樹、もうよいではないか。雪菜とて、もつ回じことは繰り返すまい。なあ、雪菜」

「はい。こめんなさい」

しゅんとしおれてしまつた雪菜の頭を、将一はまた一、三度撫でた。

「だが、俺は嬉しかつたぞ。雪菜が俺のことと、そんなに怒つてくれるとは」

「お兄さま、ホント?」

「おまえがそつだから、雪菜がいつまでも子供のよつなのだ」

「仲のいい兄妹で、結構ではないか。亡き父母も、草場の陰で喜んでおられるに違いない。雪菜。もつこのような短気は起こさんな？」

「はい」

英樹はため息をつく。

甘すぎる。

将一を見る目が、そう言っていた。

「まあ、よこ。雪菜も反省しているようだしな。おまえ達、もう入つてきてもよいぞ」

英樹がそう言つと、廊下で待つていた直也達が、部屋に入つてきた。その中には冷めたお茶を持った菊花の姿もあった。将一は菊花からその茶を一杯もらい、一気に飲み干している。一息つくと、何かを思い出したらしい。吉住を手招きした。

「渡部、俺達はこれから大倉家に向かうので、岩塙の件は明日にする。あの男は待たせておけ」

「はい。承知いたしました」

一人が行つてしまつと、全員の視線が雪菜に集中する。

「えつと……。心配かけて、すみませんでした」

ペコリと頭を下げて謝る雪菜に、皆から苦笑がもれた。

「菊花、こる？」

青白い冬の月が冴えわたる夜半過ぎに、雪菜ははつと菊花の部屋を訪れた。

「雪菜さま？ どうなさつたんです、こんな時間に」

「見て見て。これ、作つたんだ」

雪菜の手には小袋が一つ、握られていた。

「まあ、かわいい。雪菜さまが作られたのですか？」

「うん。明日から直也と広瀬さんが討伐隊の準備で、海神に行くじゃない？ 今日買つてきたアメを、これに入れようと思つて。よくできているでしょ？」

海神とは都に運び込まれる荷物を主に扱う、大栄一の港である。

屋敷からは一時間もかかるないで行けるが、商人とのつきあいで夜遅くなることも多いので、橋の者が使う簡単な宿舎が用意された。

「ええ。直也さま、あつと喜ばれます。広瀬さまの分まであるなんて。広瀬さま、甘いものが好きですし」

あれ？

菊花、いつもと違つ……？

「ねえ。菊花、顔色が悪いよ。具合が悪いの？」

小袋を手に取つて眺めている菊花の顔は、青ざめついて血の気がない。

「あ……。はい、頭が痛くて……」

「そうなの？ 大丈夫？ あたし、薬をもらつてきてあげる。ちよつと待つてね」

雪菜はそう言つと、菊花の部屋から出ていった。

真冬の廊下は足元から寒さが這い上がりてきて、体の中にもう冷気が侵入しようとすると。雪菜は冷たい空気を振り払おうと、足早に歩いた。

「あ……。野犬の遠吠えが聞こえる」

雪菜は足を止めた。

それは闇の粒子を揺らしながら、雪菜の耳に届く。いつもは遙か遠くで聞こえるのに、今夜はやけに声が近い。遠吠えは、ひとつ、またひとつと増えていく。

「やだな。気味が悪い」

耳が痛くなるほど冷えた闇の中で、それはいつまでもじだまして、雪菜の耳を震わせていた。

## 第三話 不安の萌芽（3）

「直也、おはよー！」

「おはよー。朝から元気だな」

雪菜は、母屋の裏にある小さな池のほとりで、直也と待ち合わせをしていた。朝食をとつたら、直也はすぐに海神へ出発する。その前にちよつと会いたい、と雪菜が直也に言つたのだ。

「はい。これ、疲れた時に食べてね」

雪菜は、昨夜作った小袋を渡した。

「これは？」

「アメだよ。こっちの、青葉色の小袋が、直也の分ね。これには、直也の好きな味のアメだけが入つてるから。こっちの柳模様の小袋は、広瀬さんに渡してね。なにが好きなのかよく分かんなかつたら、いろんな味のが入つてるよ」

「小袋まで作つてくれたんだ。ありがとー！」

直也は、雪菜が作った小袋をずっと見つめている。動く指の間から、アメの転がる音がした。

あ。すごく喜んでる。

雪菜は直也の嬉しそうな顔を見て、ほわほわとした幸せな気分になる。

「ねえねえ」

「ん？」

手をつないでいい？

そう聞ひつとした時。

「俺の分まで用意してくださつたんですか。いや、嬉しいなあ  
和馬の声だつた。

「広瀬さん……」

「二人の邪魔して、すみませんなあ。あれ、直也。なんか文句……」

「どうしたんですか、こんなに朝早く！」

「恐いなあ。なんか怒られているみたいだし。散歩だよ、ただの「

「本当ですか？」

「本当、本当」

和馬は笑つて言つ。だが、どうも信じられない。

「広瀬さんは、毎日こんなに朝早く散歩しているの？」

一緒に歩き出した和馬に、雪菜は訊いた。

「いや、ここまで早くはないんですけど、なんか目が覚めちゃって」

「ああ。それはマズイですね」

「なにがマズイって？俺を年寄り扱いしたいのかな、直也」

「大体、わざとらしく邪魔するところが、すでに若くない証拠ですよ」

「ほおお。邪魔されんかったら、一体なにをするつもりだったのかな、直也くんは」

「何もしませんよ」

「じゃあ、そんなに不満そうな顔することないだろ。ねえ、お姫さん」

しかし、雪菜の興味は既に別へ移つていた。

「ね。なんか、あっちが騒がしくない？」

雪菜が指さす方向から、みすぼらしい格好の男が一人、歩いてきた。彼等の背後には生垣があるのだが、その奥から数人の声が聞こえてくる。

「そうだな。男の声が複数する。俺がみてくるから、雪菜はここで待つていろ」

だが、直也がそう言つた時にはもう、雪菜は歩いてきた男達に声をかけていた。

「ねえねえ、何があつたの？」

男達は最初、雪菜が誰だか分からなかつたようだが、すぐに主人の妹だと気付き、背筋を伸ばして答える。

「はっ！昨日、真砂から到着した原口という男が、屋敷のはずれにある竹林で死んでいるそうです！」

「原口……」

原口って、昨日広瀬さんが言つていた……。

雪菜は後ろを振り返つた。直也も和馬を見ている。そして、和馬は笑みを浮かべていた。嬉しい時に見せる笑顔ではない。

負の感情だけを練り合わせて作つたような、冷たい笑顔……。

「仕方ないでしょうな。天罰というやつですよ。それじゃあ、俺は失礼しようかな。直也、時間に遅れるなよ」

和馬は、そう言つと、背中を向けた。そして、何事もなかつたかのように歩いていく。

今は……。

今のは、本当に広瀬さん……？わざわざまで直也をからかつていて広瀬さんなの……？

雪菜は、直也の腕を掴んだ。そして、直也を見上げる。直也の顔もこわばつていた。雪菜も直也も、全身に緊張感がまとわりついている。

まさか、広瀬さん……。  
まさか……。

「戾ひう、雪菜」

直也の手が、雪菜の頭にぽん、とのせられた。

「うん……」

雪菜は自分の手を重ねて、うなずいた。

## 第四話 真実の破片（1）

「原口が殺されたらしいな

将一は英樹と吉住、それに初老の男 小早川敏郎を見ながら、言つた。

敏郎は将一の父の代から仕えている、橘家の重臣である。忠実に死くしてこの経験豊富なこの古い家臣を、将一は大いに頼りにしていた。

「はい。早朝、屋敷のはずれで発見されました。貴船殿は、仲間割れとお考えのようですが

「我々が原口を呼び出したと知った仲間が、口封じのために殺した可能性が一番高かろう。小早川は、そうは思わんのか

「儂も仲間割れのセンが一番高いと 생각しております。しかし、私的な争いだった可能性もございます。なにしろ問題の多い男のようでしたからな。そうであらう、渡部

「さようだ」さこます。女癖も悪かつたと聞いております。現在までの調べで、原口に恨みを持つ人間が複数名挙がっております

黙つて三人の話を聞いていた将一が、右手を挙げた。その動作で一瞬にして、場が静かになる。

「渡部

「はつ

「確かに、広瀬は以前に笠原村の領主をしていたな

「はい

「広瀬を呼べ。一応、当時の話を聞いてみよ。参考になる話があるかもしれません

「かしこまりました

渡部が退出する後ろ姿を見ながら、将一は何度も扇を開けたり閉めたりしていた。

部屋の中は、ほんわりとした暖かさで満ちている。幸せだった頃の断片が菊花の周りを漂つて、束の間の安らぎを提供しようとしているのだろうか……。

菊花は夢をみていた。父と母に愛され、ただ無邪氣でいればよかつたあの頃。

そして、一緒にいるだけで全てが満たされた、の人……。もう夢でしか触れられない。夢でしか、触れてはいけない。ならば、せめて今だけ……。今だけでも、あの時のように、あなたと……。

差し出された腕、絡みあつた指。そして、熱を含んだ互いの視線。

全身があなたを求めていた。あなただけが、欲しくて欲しくて……。

田覚めると、枕元に手紙が置いてあった。

薬が効いているみたいなので、起こしました。今日は、ゆっくり休んでて。

雪菜の字で、そう書かれていた。

菊花……。

あの人声が、まだ耳に残っている……。

夢に埋没しそうなこの気持ちを、雪菜の手紙が現実に引き戻した。いけない……。ゆっくりと寝ている場合じゃないのに。

雪菜が持つてきてくれた薬のおかげで、頭痛は治まっている。菊花は起き上がりつて、布団を畳んだ。そして、素早く身支度を整えると、暖かい部屋から出て行つた。

「なるほど。では原口は、洪水で被害を受けた村の復興費用を横領し、その罪でおまえが村から追放したというのだな」

「はい。ですので、その後の交流関係についてお話できる」とは、特にございません」

「ふむ……」

将一は、右にいる敏郎を見た。

「広瀬が屋敷にいる日は、ほぼ同じ時刻に名波に乗っているであろう。その時に、不審な人物は見掛けなかつたか」

続く敏郎の質問にも、和馬は首を横に振つた。

「申し訳ございません。気がつきませんでした」

英樹が将一を見た。敏郎と吉住も見ている。

「広瀬、出発前にすまなかつたな。特に決め手になる話はないようだ。原口の件は英樹と渡部が預かることになつてているので、もしも何かを思い出したら、伝えてほしい。」「苦労だつたな。海神へは気を付けて行つてこい」

「はい。お役に立たず、申し訳ございません」

和馬はお辞儀をして、出て行つた。

## 第五話 真実の破片（2）

和馬がいなくなり、部屋の中はまた、将一、英樹、敏郎、吉住の四人になる。

「渡部。さつきの広瀬の話を、どう思つた？」

「特に不審な点は見当たりませんでしたが」

「話はな。俺が気になつたのは、広瀬の話し方だ。やけに淡々としていなかつたか？小早川はどうだ」

「そうですね。まるで感情を表に出さないよう、自制していたかのように見えましたな。原口のやつたことを考えれば、もう少し軽蔑や嫌悪が出た方が、確かに自然ですね」

「では、広瀬を張るか？」

英樹に言われ、将一は少し考える。

「いや。状況をみてから考えよう。田星をつけている奴らを押されるほうが、先だな。ただ、釈然としなかつただけだ。おまえ達もご苦労だつた。持ち場に戻つてくれ」

そう言つて将一は、扇で肩を数回たたいた。そして頭の中にある、数十もの解決しなければならない用件に、優先順位をつけ始めた。

「広瀬さん、遅いね」

「そうだな」

和馬が将一に呼び出されたので、海神への出発が延びている。雪菜は直也と一緒に門の近くで座りながら、和馬を待つていた。

「広瀬さん……。何もしていらないよね」

「……」

「直也？」

「今の段階では、なんとも言えない。ただ、もしも原口の死因に広瀬さんが関わつているとしたら、それには余程の理由があるからだと思つ」

直也、否定はしないんだ……。

直也のこそこそ、冷静で頼れると懇うせび、ちよつと冷たいな、とも思つてしまつ。

だつて、普段あんなに仲がいいのに、じりじりして絶対にやつていな、つて言い切らないんだらう。もしもあたしが何かに巻き込まれても、今みたいに冷静でいるのかな……。

「待たせたな、直也。悪い悪い」

和馬の声が近くで聞こえた。いつも通りの和馬が、名波を曳いてやつてくる。

「あれ、お姫さん。直也のお見送りですか？」

「うん。広瀬さんも気を付けてね」

「どうも。いただいたアメ、ありがたく」馳走になりますよ」

和馬は笑いながら雪菜に手を振つた。直也は馬に乗つて、じやあとだけ言つ。

前から気になつていた直也のやつせなさが、やけに雪菜の不安をざわつかせる。

そういうえば、直也つてあたしのじよ、じり思つてこらんだらう。嫌われているとは思わないけど、もしかして迷惑なのかな。だから、そつけないことが多いのかな……。

その考えが、雪菜から無邪気な笑顔を奪つ。

あたし、ちゃんと笑えているかな。変な顔、していないかな。

そういうながら、雪菜は直也と和馬に手を振つた。

## 第六話 真実の破片（3）

「貴船殿、お邪魔してもよろしいですか」

「渡部か。かまわん、入れ」

吉住に続いて泰史が部屋に入ると、書類に印を通していた英樹が怪訝そうな顔をする。

「原口の調査の件ですが、黒川を加わらせたいと思いまして。」「許可いただけますか」

「かまわぬが、なぜだ」

「黒川は商家の出ですので、今回の件ではなんらかの役に立つのではないかと」

「そうなのか？」

「はい。両親が亡くなつたあと、渡部さまにいらっしゃるお屋敷を紹介していただきました」

「そうか。雪菜の警護とは、わけが違つた。わかつておるだらうな英樹の言葉は、あくまで冷たい。

「承知しております」

「ならば、よい。このまま渡部の下に入れ

「ありがとうござります」

「総領殿は討伐隊の件でお忙しいが、貴船殿がいらっしゃれば、橋の内部のことは心配いりませんな」

「世辞はいらぬ

「世辞ではござこません。事実でござります」

「……」

吉住の言葉に、英樹は沈黙で返した。

「それでは、失礼いたします」

「これより、よろしくお願ひ申し上げます」

「つむ」

英樹の返事は、無機質なままだ。

けれど、泰史は気にしなかった。英樹はいつもこうだ。

親しみやすさはどこにもないが、その代わり、感情で仕事を乱すこともない。

機械的なやりとりに慣れてしまえば、そりやうづらじに相手ではなかつた。

吉住と泰史は英樹の部屋を出でから、庭へ出る。

「今日も寒いな」

「これから、もっと寒くなりますね」

二人の吐く息は白く震えていて、そのまま音をたてて凍つてしま

いそうだった。

「いよいよだな」

「はい」

「覚悟はいいな

「もちろんです」

迷いのない泰史の返答を聞き、吉住は深く頷く。

母屋から奥まつた場所にある英樹の部屋は、静かで余計な音がない。その部屋に面した庭も、静寂を乱す異分子を排除しているかのよう、物音がはいりこむ隙間がなかつた。

砂利を踏みつける音すらも、異空間へ放りこまれてゐるようだ。

「渡部さん、どちらへ？」

吉住は、大広間へと続く回廊に向かつていた。

「ちょっとな」

「ああ。あの件か。

「渡部さんも抜け目がありませんね。さすがです」

「下手な皮肉だな」

「感心しているんです。俺も見習わないと」

「ただ待つてゐるだけでは、欲しいものが手に入らんぞ」

「ええ。

その通りです。

泰史はしばらく吉住を田で追っていた。だが建物が邪魔をして、すぐに姿が見えなくなる。

覚悟はいいだらうな。

今更言われるまでもない。苦しみぬいて決めた覚悟が、大きな塊となつて泰史の心の奥を占めている。

父の絶望、母の嘆き。

そして、現実を受け入れることへの苦悶と悲哀。それらが溶け合い混濁し、今の塊となつたのだ。

「俺は逃げ出しあしない」

泰史はそう呟いて拳に力を入れ、贅を剥くした櫛の屋敷をいつまでも見据えていた。

## 第七話 真実の破片（4）

泰史が警護を離れると雪菜が聞いたのは、英樹の「了承を得てからわずか一時間後だった。

雪菜は最初、また泰史がからかっていると思い相手にしていなかつたが、菊花にも同じことを告げられ、思わず大声を上げてしまつ。「えーっ、それ本当なの？」

「10の度、貴船殿よりお役目をいただくこととなりました。短い間では」「やれこましたが、ありがとう」「やれこました」

「どうして急にそつなるの？ あたし、なんかした？ あたしの警護、いやになつちやつたの？」

「雪菜さま、よく黒川さんの話を聞いてください。貴船殿の下で働くことになつたと黙つていいではありませんか。おめでとう」「やれこます、黒川さん。これで認められれば、また大切なお仕事につながるかもしれませんものね」

いつも通りの穏やかな笑顔で、菊花が泰史にお茶を出す。  
「ありがとうございます」

「なんで？ あたしの警護の方が楽じゃない。命の危険もないし」「命の危険は無くとも、髪の毛が減る危険がありました」「いくらなんでも、今から禿げるわけないと思うんだけど」

「わかりませんよ、そんなの。びっくりし通しでしたから、その刺激でやばいかも」

「無表情でそんなことを言われて、あまり悪いとは思えないんだけど」

「まあまあ。だけど、お一人のじやれあいが見れなくなるかと思うと、本当に残念です」

泰史と雪菜の会話を聞きながら笑っていた菊花が、しみじみと言う。

「あ～あ、黒川さんともお別れか。まあ、しょうがないか。次

の警護の人つて決まつていいの?」

「はい」

「すいぶん早く決まつたのね。どんな人?」

「気のいい人みたいですよ」

「それだけ?」

「ろくに話したことのないもんでも」

「……」

「不満そうですね」

「分かつていいんなら、もうちょっと情報を仕入れてきてよね」

「小早川殿が自ら選ばれたそうです。雪菜さまのお好みを、十分に考慮されたとか」

「うわあ。はずしそう……」

「雪菜さま」

率直な雪菜の感想を、菊花がたしなめる。

「そろそろ失礼いたします。新人も加わるそつですので、早く戻るよう」と言われているんです」

「そうですか。寂しいですけど、お仕事頑張つてくださいね。お時間のある時には、ぜひ顔を出してくださいね」

「はい。ありがとうございます」

なんとも珍しい、泰史の笑顔。

黒川さん、笑えるんだあ。

雪菜がそんなことを考えている間に、泰史は次の職場へ行つてしまつた。

「ねえ、黒川さん大丈夫かなあ。よりによつて、英樹の部下。しかも直接の上司が渡部さんつて、大変じゃない? 渡部さん、厳しそうだしさ」

「あら。けつこう優しい方ですよ」

菊花は雪菜の部屋に飾るために、白くて優雅な大輪の花を手にしていた。

「この花は、菊花に一番似合っている。

雪菜がそう思つほど、それは菊花を艶やかに見せていた。

「菊花にはね。なーんか、あたしを見る目が厳しい気がする」

「雪菜さまが、何かやらかしたんじゃありませんか」

「やつてない！……ど、思つんだけど」

「渡部さんなら、厳しくても理不尽なことはなさいませんよ。それに、黒川さんだつて自分を試してみたいでしょ。うし、今回はとてもいい機会だと思います。これがきっかけで、春に組まれる予定の蛮族討伐隊にだつて、それなりの役がつくかもしれないじゃないです

か」

「そういうもののなの？」

「そういうものですよ」

「ふーん」

「なんだか、縁が足りませんね。庭の枝を少しあたたいてもよろしいですか？」

「いいよ。好きだけ切つて」

「ありがとうござります」

ハサミを持つて、菊花は庭に出ていった。

自分を試したい、か。直也もそういうことを思つていてるのかな

……。

直也……。

雪菜は今朝の、直也のそつけなさを思い出す。

「あーあ。今日は落ち込むことが多いなあ」

床に寝転り、雪菜は小声で呟いた。

菊花は庭の低木で色合いのいい葉を探したが、今の季節ではあまり気に入るものがなく、辺りを見渡しながら、ゆっくりと歩き始め

た。

男の人ってのは仕事で認められたいものなのよ。今は辛くとも、あの人のためだからね。

雪菜にあんなことを言つたせいか、昔、母に言われたことを思い出してしまう。

今考えると、母の言葉は間違つていなかつた。あの時に思いとどまつたから、今、あの人はここまでこれたのだもの。

菊花はようやく丁度いい葉を見つけ、手にとつた。そして、ハサミで切り取る。切られた枝の断面に、薄茶の傷が小さくついていた。それは、自分に言い聞かせている言い訳で、幾筋もついてしまった心の傷を思わせた……。

「藤枝、雪菜さまはおいでかな」

敏郎の声で、菊花は我にかえつた。

「はい、お部屋にいら……」

菊花は俊郎の後ろにいる人物を見て、言葉が止まる。

「そつか、ではお伺いいたそう」

菊花が驚くことなど、予想がついていたのだらう。俊郎はかえつて菊花の反応を面白がつてているようにも見えた。

「菊花」

雪菜の声で、菊花は振り向く。

「ねえねえ、あたしも一緒に葉を選ぶ。お兄さまのお部屋にも何か飾ろうと思うんだけど、まだ注文したお花、残つてない……」

雪菜も敏郎の後ろにいる男を見て、驚いている。

「「コバジイ……？」

「コバジイとは、雪菜だけが呼ぶことを許された、敏郎の呼び名だ。まだ雪菜が幼かつた頃、小早川と発音できなかつたので、いつの間にかこの呼び名になつていた。

雪菜のびっくりした顔を見れて、俊郎は満足したようだ。

「雪菜さま、ちゅうじよつぱれこました。この者が、今度の警護の者でござります」

「……橋には珍しいタイプだね」

「青竹晴紀と申します。どうぞ、よろしく」

その男は、三十歳くらいのようだ。短く刈りこんだ髪は金色に染められていて、耳には小さなピアスが沢山ついていた。

街の中心に行けば、じついう男はそちら中でいる。

だが、橋の屋敷では、まず見かけない。

「これでも腕は中々でしてな。護衛としてお役に立つかと」

「……」

雪菜と菊花は二人口っこしている晴紀の顔を、じつと見つめた。

## 第八話 真実の破片（5）

英樹が庭石に座り、少し離れた右側に吉住が立っている。吉住の反対側 英樹の左隣には、見知らない少年が立っていた。

「遅かつたな。貴船殿がお待ちだぞ」

「すみません、ちょっと話しこんでしまったので。貴船殿、失礼いたしました」

「湊、この者が黒川だ。おまえは別の班に入るが、一応この二人にもひきあわせておこなう」「うう

「若松湊です。よろしくお願ひします」

「屈託のない、明るい笑顔だ。この少年には、どこにも翳がない。

「湊は私のばあやの孫だ。まだ都に慣れておらんのでな。まずは簡単なことを手伝わせようと思つ」

「黒川泰史です。初めまして」

「黒川とは年も近いし、話もあつだらう。仲良くしてやつてくれ」

「はい」

「では、湊。頑張るのだぞ」

「はい！」

英樹が立ち上ると、湊は頭が取れそうな勢いでお辞儀した。吉住と泰史も一礼をとる。英樹は満足そうに頷いていた。

「びっくりしたなあ。あの貴船殿が、ずいぶんと親しげなんだね」

「僕が赤ん坊の頃から」存知なので。子供の頃は、一緒に遊んでくださったんですよ。今回も祖母のわがままをきいてくださって、感謝しています」

「謝っています」

「？」

「あ、僕、今度結婚するんです。おまえは世間知らずだから、家庭を持つ前に世間の荒波をかぶつてこい、と祖母に言われて、このお屋敷を紹介してもらつたんです」

「へえ。婚約者はどんな人？」

「僕より五才年上で、しつかりした美人です。早く会いたいなあ……」

「一緒に都へ連れてくればよかつたじゃないか」

「本人に“あたしがいたら、あんた仕事になんないでしょ”って言われました」

「ふつ。」

泰史は思わず吹き出した。

「僕、早く一人前になつて、彼女を都に呼べるようになり頑張ります。なんでも言いつけてください！」

「そうだな、がんばつてくれ。黒川、彼は牛島の班にいれる。案内がてら、説明してやつてくれないか」

「はい、わかりました。じゃあ、行こつか」

湊は吉住にもお礼を言つてから、泰史の後を追つてきた。吉住も仕事に戻ろうとしている。

だが泰史は、吉住が背を向けていながらも、自分達の様子をつかがつてしていることに気が付いた。

渡部さん……。

隣では、湊が無邪気に村の話を始める。ほつと息をつきたくなるような真冬の陽射しが、泰史の周りを穏やかな温もりで満たしていた。震えながらちぢむつて耐えている者をときほぐしてくれる、ひと時の安らぎ。

それは身分も年齢も関係なく、誰もが享受できる暖かい優しさであるはずだ。

だが、泰史の心の中までは、その陽射しもせしむことはできなかつた。

「それで、僕はどんな事をお手伝いするんでしょうか」

「この前、原口といひ岩塩湖の第一倉庫長が死んだことは、聞いているだろ?」

「はい」

「原口は岩塙の横流しをしていた。その仲間をつきとめることが俺達の目的だ。牛島さんの班は、仲間の候補にあがつてている七戸雅也という男を探つていて。きみには、その手伝いをしてもらひ」

「え？ じゃあ、犯人は捜さないんですか？」

「原口は岩塙の横流しをして、橋に不利益をもたらしたんだ。特に重要人物というわけでもない。かたきを取る、という発想はないだろうな。下端の殺人よりも、今後も問題になるかもしない可能性を潰す方が、橋にとつてよっぽど重要だ。それに、仲間割れで殺されたとしたら、調べている間に犯人が浮上してくるかもしれない。上の人達はそう考えている」

「そりなんですか……。でも、ずいぶん早く仲間がわかつたんですね」

「渡部さんは岩塙の総括長を何年かやつていらつしゃるので、以前から原口のことは調べていたらしい。だけど、決定的な証拠が挙がらないまま、原口が殺されてしまったんだ。だから、怪しい奴の目星は、それなりについているみたいだよ」

「すごいですね」

「そうだね」

「渡部さんだけじゃなくて、黒川さんもですよ」

「俺？」

「僕とそう変わらない年なのに、黒川さんも大人っぽいなあ。僕はのどかな村でのんびりと育つたから、祖母はそういう所を心配したんですね。すごく刺激になります」

「若松くんの家は、村では裕福なほうなんだろう？ 幸福に育つた人間のにおいがするよ。うちの姫さまと同じ種類の人間だ。そういう人は、一生そのままでいることを考えていればいいと思うよ」

「そういえば橋の姫さまって、どんな方ですか？ やっぱり、おしゃかでか弱い、深窓のお姫さまですか？」

「いや……。それは、どうだろ？」「

「教えてくださいよ。僕じゃ、お会いできる機会もないですよ」

「そのうちに見かけるよ。とにかく、じつとしていない人だから」

「おお、黒川。彼が若松か」

庭に並んだ家臣の隊舎から、大柄な男が出てきた。

「彼が牛島さんだ。お待たせいたしました」

「若松と申します。よろしく、『指導』鞭撻のほどお願い申し上げます」

「つむ。貴船殿のばあやさんの孫といつても、特別扱いはせんぞ」

「はい！ よろしくお願ひします！」

「じゃあ、俺はこれで失礼します」

「ありがとうございました、黒川さん」

元気よく挨拶をする湊を見て、泰史は軽く手を上げた。湊はそれを見ると、嬉しそうに両腕を大きく振った。

## 第九話 真実の破片（6）

直也と和馬は早目に宿舎を出発して、街の様子を見てから製鉄所に向かうこととした。

ゆっくりとした速度で歩き、街の空氣を深く吸う。真砂の近くにある高浜港とは、雰囲気が大分違っていた。都に運びこまれる荷物が主流なだけあって、裕福そうな商人の姿をあちこちで見かける。

一日の始まりを告げる、朝の光。

だが、都を支えるこの港に漂つるのは、淨化された清々しさではない。

一晩中放たれ続けた熱氣の名残が夜明けの寒さで凍結し、朝の光を浴びて除々に溶け出し始める……。

そんな活氣だった。

直也も和馬も、黙つて歩く。

直也は、昨日の和馬の様子について考えていた。

昨日、原口が橘の屋敷にいたこと、そして死んでいたことについて、広瀬さんが全く驚いていなかつたのは何故なのか。

その答えが直也の頭にこびりついて、離れない。

たつたひとつ答が、いつまでも居座つている。

「広瀬さん、お早いですな。もう視察においてですか」

船が停泊する海岸沿いを歩いていると、小太りの男が声をかけてきた。橘と深いつながりがあり、造船を請負つている佐山勇蔵という商人である。豪商なだけあって、和馬や直也より数倍は仕立てのいい着物を身につけていた。

「やあ、佐山さん。まだ造船所は開いていないだろつと思つて、先に製鉄所へ行こうとしているところですよ」

「おや、そうですか。水越殿は最近おみえになりませんでしたな。

立派な船ができましたぞ。広瀬殿、いかがです。急ぎの「」用事でなければ、先にこちらを見にいらつしゃいませんか。」

「そりや、かまわんが。どうする、直也。船を見たいか？」

「はい！」

直也の素直な反応に、勇蔵は満足気だ。直也が船の見学をとても楽しみにしていると知っていた和馬は、にやにやしている。

「では、参りましょう」

和馬は勇蔵と並んで歩きながら、馬の話を始めた。

勇蔵は海神の中でも最有力の商人だ。岩塩の流通も、勇蔵と他の有力な商人が組んで仕切っている。今回の造船とて、橘の資金だけでは到底足りない。橘と勇蔵等の大商人が資金を出しあって、色々なものを揃えているのだ。

「水越殿、あれがそうですよ」

勇蔵が指さす方向には、白い帆をはったひときわ大きな船が、十数隻の小船を従えて停泊していた。

鋼で補強された、力強い船体。小さな窓からは、近年開発された火薬砲がのぞいている。優美さなどぞこにもなく、無骨ですらある。けれどその姿こそ、新しい地を切り拓くに相応しい。

「すごい……」

あの船が大海原に乗り込み、疾走し、橘を一層の繁栄に導くのか

……！

「満足いただけたようですね。あの船ならば技術者や金塊も、風に左右されないで運べます」

九年前の討伐隊派遣の時、大山脈の向こうに金脈が眠っているとの情報が入り、将一の父は調査の人間を派遣した。そして彼らは小さな金塊と、予想よりも大規模な金脈の存在を報告してきた。だが当時は金脈を探る準備ができていなかつたので、宝の山を前に撤退するしかなかつた。その後、将一の父は亡くなつたが、息子の将一の代になりようやく機会が巡ってきたのだ。これが、討伐隊の総指揮官に将一がこだわる理由のひとつであり、勇蔵等が気前よく協力

する訳もある。現在の貴族の資金力、そして統率力では、とても未開の地を切り拓くことはかなわない。

あの船が橋の未来を運ぶのだ。橋はこれからますます強大になる……！

その想いは、少年期を脱したばかりの直也を奮い立たせるのに十分だつた。

「うわあ、すごいですね、牛島さん！ 僕、こんなに沢山の船を見たの、初めてです！」

直也がまだ見ぬ大地に想いを馳せていると、突然大きな声が響き渡つた。

「こら、若松！ 勝手に近寄るな！ あ、これは広瀬殿。新人が失礼をいたしました」

「君が若松くんか。貴船殿のばあやさんの孫だろ？」

和馬は大声の主の尊を、とっくに耳にしているらしい。当たり障りのない笑みを浮かべながら、湊に話しかけた。

「僕、そんなに話題になつてているんですか？ 何回もそう言われたんですけど」

「そりや、あの貴船殿が笑顔で話していた相手となれば、話題にもなるさ。都は初めてかい？」

「はい！ 珍しいことばかりで、昨夜は興奮して眠れませんでした！」

「あはは、元気がいいなあ。直也、少しこの辺りを案内してやれよ。かまわんだろ、牛島」

「はい。道に迷うなよ、若松

「はい！」

「牛島は、一緒に茶でもどうだ

「すみません。せつかくですが、すぐに隊舎へ戻らなければならんのです。今度、ぜひ一緒にさせてください」

そう言って、牛島は足早に歩いていった。

「じゃあ、行こうか。広瀬さん、一時間ほどで戻ります

「ああ」

「よろしくお願ひします。えつと……」

「ああ、俺は水越だ」

「水越さん、よろしくお願ひします！」

「なんだか素直で、ちょっと面白い奴だなあ。もしかして、広瀬さんもこんなふうに俺を見ているのかな。

そう思うと、直也はなんだか胸の奥がくすぐつたくて、口の端がわずかに上へ動いてしまった。

「牛島さんの班はどうだい？」

直也は、湊を海守の丘という場所に連れて行こうと思つた。小高い丘からは港の景色がよく見えて、途中にも色々な店がある。雪菜だつたら全く興味を持たないような類の店ばかりだが、湊なら幾つか気に入る店もあるだろう。

「まだ、よく分かりません」

「あはは、そりやそうだ」

「殺された原口さんつて人、水越さんは存知ですか？」

「いや、俺は全く知らないな」

声に緊張感が混じつていたかもしれない。直也はしまつたと思つたが、湊は全く気付いていないようだ。

「昨日、牛島さんが色々と教えてくれました。野犬に食い散らかされてはいたけれど、殺人の証拠らしきものがあるそうです」

「ふーん……。それは、なんだい？」

「背中に貫通した刃物の後があるそうですよ。それと背中側の肋骨に少しだけヒビがはいつていたので、間違いないだろうって」

「そうか」

背中側の肋骨にヒビ……。

やはり犯人は、刀を使った男か……？

直也の口数が減つたのを、変だと思ったのだろう。

「あの、僕、なにか失礼なことをしましたか？」

湊が心配そうにたずねた。

「いや。そんなことはないよ」

「それは言いつつも、直也の気持ちは重くなるばかりだ。

湊は直也の否定に安心したのか、すぐに笑顔になった。そして初めて見る店の品々に、目を丸くして驚いていた。

直也が造船所に戻ると、和馬が書類を用意して待っていた。

「直也、悪い。これを小早川殿に届けてくれ。神原と貴族の手の者には、気を付けて行けよ」

「はい」

書類を受け取りながら、直也は変化してしまった自分の感情を、改めて認識する。

広瀬さんじやない。そう信じたい。

そして、思う。

いつか、この迷いをふりきる答えが出るのだろうか。

たとえ出たとしても、果たして自分は受け入れられるのか。

もしも一番認めたくない現実をつきつけられたら、俺はどうするのだろう。

街の喧騒にかられながら、直也は同じ問い掛けを何度も自分に投げつけた。

## 第十話 過去の櫻（1）

織音が外に出でみると、英樹が小さな池を眺めていた。

「ねえ、何してんの？ 寒いでしょ。中に入つたら？」

背中に抱きつき、腕を英樹の胸に回す。いつも顔をしかめている英樹だが、この家で一人きりの時には緊張感が消えている。突然抱きついても、体が強張ることはまずない。

「そうだな」

織音の言葉に、英樹の雰囲気が和らぐ。

「お風呂を沸かしたからさ、一緒に入ろう。こんなとこにいたから、体が冷えちゃってるよ」

英樹がゆっくりと振り向いた。そして、織音の体に英樹の腕が回される。厚い肩に頭をのせると、大きな手が織音の頭をそっと包んだ。

「織音」

「二人でいる時はその名前で呼ばないつて、約束したじゃない。今は神原の歌い女じゃないんだから」

「美乃里、将一はまだお前のことを諦めてはおらんのか

「うん……」

織音の心の揺らぎに呼応したかのよつに、湯船いっぱいのお湯が波打つた。

「まだ色々と言つてくるね」

「そうか」

「気にする」とないわよ。あの人、他に四人も口説いている女がいるんだから。あたしのことがばれたって、じゃあ次にいくか、で済むわよ

「そう簡単にはいかぬ。将一の面子といつものがある。仕方ない。お前の」とはもうしばらく隠しておこう

「ふーん。あたし、まだ隠される存在でなきゃいけないんだ」

「美乃里」

「仕方ないけど」

「もつしばりく辛抱してくれぬか。それよりも、この家に住むところ話は考えたか？」

「うん」「……」

「ここに住めば、いつでも会えるではないか。そうすれば、お前も寂しくあるまい」

「逆だよ」

「なにがだ」

「ここに独りで住んであんたを待つほうが、よっぽど寂しこよ」

「理由がわからん」

「いつ来るか分かんないあんたを、ずっと待つんだよ。ちよっとした物音でもあんたが来たんじゃないから、神経をどがりせりやうよ。そんなの、いやだな」

「そうか……」

英樹は黙った。その表情は、庭に佇んでいた時と同じものだ。織

音は英樹の頭を胸に抱き寄せて、髪を梳く。

「ねえ。さつき、何を考えていたの？」

「たいした事ではない」

「だけどあんた、哀しそうだつたよ」

「そんなことはあるまい」

「ううん、哀しそうだつた。いつもやつて抱き締めたくなっちゃうくらー

「……昔の事を思い出していただけだ」

「昔の事って？」

「正月には毎年祖父の家へ挨拶を行く習慣だったが、一番に着いたのに、本家の将一が先だと言われ、一時間ほど待たされたことがある」

「なに、それ。感じ悪いわね」

「あの時が、己の立場を自覚した最初だと想つてな  
織音は英樹を強く抱きしめた。

「美乃里？」

「あたしが側にいれば、」うやうやしく慰めてあげられたの」  
英樹は笑い、織音の胸に顔を埋める。

「おまえとこりやつて、一人だけで生きていければよいのにな  
「本当にそんなことを思つの？ 歌い女のあたしと？」

「当たり前ではないか」

「そつかあ……。 そ、うなんだ」

織音はもう一度、英樹をぎゅっと抱きしめた。

「どうした？」

「嬉しい。あたし、嬉しいの……」

織音の瞳からこぼれる涙。白い肌を伝わって、湯の中で溶けてい  
く。

英樹の唇が、頬の涙をすくつた。柔らかいその感触に、織音の心  
は安らいだ。

「おまえのためにも、俺は己の心に負けはせん。どんな甘言をやられ  
やかれようと、俺は……」

英樹の腕が、織音の肩に回される。そして、きつく抱きしめられ  
た。

「英……」

織音は言葉を続けることができなかつた。英樹の唇が重なつて、  
織音の疑問を封じ込んでしまう。いつになく激しい愛撫が、心の内  
にしまいこんだ英樹の葛藤を物語ついていた。

「英樹……」

織音は全身で、それに応える。  
もつと強くあたしを抱きしめて。

あなたの心が、あたしの肌であたためられるよつと。  
あなたの苦しみが、あたしの汗で流されてしまつよつと。  
浴室にこもる湯気が薄い雲となり、外に流れていぐ。けれど汗を

かいた身体には、冷えていく空気が気持ちいい。

やがて、心地よい疲労が織音に訪れる。

英樹の胸に頭を預け、織音は気だるい陶酔に身を委ねた……。

## 第十一話 過去の楔（2）

吉住が街を歩いていると、菊花が和菓子店の前にいた。暖簾をくぐり、店内へ入つていく。この店は雪菜が好きな菓子を何種類も置いてあるので、菊花がよく買いにくると聞いてはいたが、ここでは会うのは初めてだった。

「藤枝さん」

店に入り声をかけると、菊花が驚いた顔をする。

「渡部さま。お菓子屋さんでお会いするなんて」

「藤枝さんが入つていくのを見かけたからですよ。雪菜さまのおやつですか？」

「ええ。雪菜さまも来たがつていらしたのですが、ここに来ると、あれもこれもと欲しがられるので、今回はお留守番です」

「雪菜さまは、何でも買えるご身分ですからね」

「でもお小遣いの額は、そんなに多くはないんですよ。貴船さまが厳しく監視していらっしゃるし」

「それは大変そうだ。ところで、藤枝さんは何が好きですか？」

「今季節なら、あれかしら」

菊花が指したのは、芋を甘く練りこんで、冷やして固めたあと蜂蜜をつけて焼いた菓子だった。

「じゃあ、それを十個包んでくれ」

吉住が店員に告げる。

「渡部さま？」

「雪菜さまには内緒ですよ。これ以上甘いものを召しあがるのは、お体によくない。侍女達で食べてください。十個で足りるかな？」

「ありがとうございます。雪菜さま付きの者で分けますから、十分です」

「今度は俺が持ち帰れる時に、沢山買つてきますよ。その代わりといつてはなんですが、時間があるなら、ちょっとお茶でも付き合

つてください。次の約束まで、一時間ほどあるんですね

「はい。喜んで」

菊花が注文した菓子を吉住が受け取り、店を出る。三分ほど歩くと、きつい視線を感じた。気配を探ると、和馬が武具店の軒先に立ち、こちらを見ている。

背の高い吉住が大通側を歩いているせいだろうか。菊花は和馬に全く気付いていない。吉住は何も気付かないふりをして、菊花と談笑した。

「落ち着いていて、いいお店ですね。」

「やつぱり女性は、こういう店が好きですか?」

「ええ。食器もすくなく可愛い。渡部さまは、色々なお店を存知ですね」

「商人は、こういう店にも詳しくてね。彼等に教えてもらつんですね。ここに入った時は、藤枝さんを連れてきたら喜ぶだらつと思いました。といひで、まだ顔色が良くなありませんね」

「そうですか?」

「ええ。元気もありませんよ」

「まだよく眠れないからだと思います。だけど、大丈夫です」

「大丈夫、ですか……」

「渡部さま?」

「俺の母も、よく大丈夫と言つていました」

「お母さまが?」

「俺の母は地方の豪族の娘でね。父は下級貴族でした。母が御所に勤めていて、知り合つたようです」

菊花の手の動きが止まっている。吉住がこんな話をするのは初めてなので、驚いているのだらつ。しかし吉住は、かまわずに話を続けた。

「身分違ひの結婚でね。母はずいぶんと苦労したそうです。結局、俺が十歳の時に両親は離婚し、母は実家に戻りました。裕福な家だ

つたので生活には不自由しませんでしたが、やはり肩身が狭かつたのでしきう。よく大丈夫、大丈夫と言っていました。あれは俺ではなく、自分にいいきかせていたんでしきうね

「渡部さま……」

「だから俺は、女性の大丈夫が心配なんですよ。藤枝さんも、無理をしないでください。辛ければ、いつでも俺を頼つて欲しい。そう思っています」

「ありがとうございます……」

「つと、そろそろ時間だ。誘つておきながら慌しくて、申し訳ない」

「いいえ。渡部さまの意外なお話も聞けましたから」

吉住は勘定を済まし、菊花と外に出た。

「荷物が重いから、本当は屋敷まで送りたかったんですが」

「お心遣い、ありがとうございます。ねえ、渡部さま……」

「なんですか？」

「お仕事にやりがいを感じていらっしゃいますか？ 充実されていらっしゃいますか？」

「充実はしていますよ。登り進む橋の家臣ですからね」

「そうですね……。あ、ごめんなさい。お約束があるので」。今日

はありがとうございました

「こちらこそ。よかつたら、またつきあつてください」

「はい」

菊花は手を振つて帰り道についた。菊花のその姿が、とても可愛らしく。

吉住も小さく手を振りかえした。

だが、道を歩くうちに、吉住の雰囲気が変わり始める。

あらゆるもの全ての隙を狙うかのような目付きになり、口元が引き締まり、そして戦いを挑む顔付きへと変貌する。

その表情のまま吉住は路地裏へと入り、細い道を歩き続け、生垣に囲まれた小さな家の前で止まった。人目がないことを確認すると、吉住は玄関を開ける。

昼だというのに、家の中は薄暗い。その家は、雑踏から切り離された空間に存在していた。

「魚沼さま。ご足労をおかけしまして、申し訳ございません」

吉住は恭しく頭を下げて、挨拶をした。相手は豪奢な衣裳を身につけた、上流貴族の男だった。

## 第十一話 過去の楔（3）

あーあ。なんだか昨日から、なんにもやる気が起きないなあ。  
雪菜はため息をつきながら東屋で仰向けになり、足を上に伸ばしたり、下に向けたりしていた。

静かで小さな空間が、とても心地いい。外国風の建物も、雪菜がここを気に入っている理由のひとつだ。

こんな格好しているところを菊花に見られたら、行儀が悪いって怒られちゃうな。そういうえば、そろそろ帰つてくる頃じゃない？  
おやつはなにかなあ。

「ゆ……雪菜……」

あれ？

聞き覚えのある男の声が戸口から聞こえる。見ると、直也が真っ赤になりながら立っていた。

「どうしたの、直也。海神に行つてるんじやなかつたの？」

「い、いいから、足、降ろせ」

珍しく直也がどもつている。

「ん。わかった」

「し、失礼した。今のこととは誰にも話さないでほしい」「いやいや、いいもん見させてもらいました」

「正弘！」

直也に隠れて見えなかつたが、戸口の外で男女の声がした。

「誰かいるの？ 直也、海神は？」

「小早川殿に用事があつて戻つてきたんだ。雪菜のところに寄つたら、北庭の東屋にいるつて言つて言われて、探していた。一緒に夕飯を食べてから戻るつて思つて。あ、藤枝さん、ここです。こちの東屋でした」

「珍しい、直也がそんなことを言つなんて…」

雪菜は飛び起きて、直也にまとわりつぶ。

「ねえねえ、直也はなにが食べたい？ それとも、今日はあたしがなにかつくるつか？ 直也はあたしのつくつた料理を食べたことないでしょ？ あ、菊花、寒いのに探させちやつて、『ごめんね』

雪菜が戸口の外をのぞくと、菊花が立ちつくしていた。視線は、さつき直也と一緒に来た女に注がれている。

「菊花お嬢さま……」

女はかすれた声で、そう呼んだ。

それを聞くと菊花は一、三歩後ずさり、背を向けて走り出す。

「菊花、どうしたの！ 直也、この人達、だれ？」

「この前亡くなつた原口さんの家の人に頼まれて、遺品を取りに来たと言つていた。広くて帰り道が分からないと言つから、見覚えのあるところまで一緒に行こうと思つていてるんだが」

原口って、あの？

「すみません、今の方は白峰菊花をまでしょつか」

「つうん。藤枝菊花だよ」

「藤枝？ 広瀬ではなくて？ では、広瀬さまとおはう結婚されていらっしゃらないのかしら……」

え……？

今、広瀬つて……。

「彼女は独身です。それより広瀬とは、広瀬和馬のことですか？ 笠原村の領主をしていた」

「ええ、そうです。広瀬さまもこひらのお屋敷にいらっしゃるのですか？ 広瀬さまは、他の方ども結婚されていらっしゃるのですか？」

「いえ、広瀬さんも独身ですが」

「じゃあ、何故お二人は一緒にならないんでしょう……」

「ねえ。ちょっとその話を、中で聞かせてくれない？」

雪菜がそう言つと、女は男と田を合わせたが、すぐに頷いた。

「わたくしは三田玲子と申します。こちらは三田正弘、わたくしの

夫で「いやこます。わたくしは白峰家で、幼い頃から働いておりました」

「菊花は白峰って名前だったの？」

「はい。付近の信仰を昔から集めていた、由緒ある大きな神社の一人娘でいらっしゃいます。あの近辺の中心は笠原村でしたので、ご一家は何代も前からそこに住まわれ、村の総代もなさっていました」「どうして菊花は逃げ出したのか、知っています？」

「さあ。わたくしにも理由が思い当たりません。でも、もしかした

ら、笠原村のことを思い出されたくないのかも……」「思い出したくないほどのことだが、笠原村であつたんですか？」

直也の質問に、玲子は肩をびくつかせた。

「そう……ですね。菊花さまにとつて、とても辛いことがあります」「辛いことつて？」

雪菜の問いかけに、玲子はしばらぐの間床に視線をさまよわせていた。

直也は黙つている。雪菜も玲子を急かさない。

そんな様子に安心したのだろう。

「あれはもう、十一年も前のことになります……」

しまいこんだ昔日を探しながら形にする。そんな目をしながら、玲子はゆっくりと話し始めた。

## 第十二話 過去の楔（4）

笠原村は長い間、都の貴族が支配する領地でした。けれどその貴族が没落し、新興勢力の広瀬家が新たな支配者となつたのです。

「ねえ、玲子。新しいご領主さまのところに挨拶に伺うんですつて。着物はあたしのを貸してあげるから、一緒に来てね」

「菊花の着物では柄が若すぎますよ。いらっしゃい、玲子。わたしが昔着ていたものを、一枚あげましょう」

わたくしは奥さまと菊花さまの外出時にお供を命じられることが多く、偉い方のお屋敷へ伺う時などは、奥さまが着物をくださることも珍しくありませんでした。

奥さまがくださったのは、美しい菖蒲色の着物でした。わたくしはそれを着て、挨拶に同行いたしました。

一方菊花さまは、桜色の地色に珊瑚色やたんぽぽ色など、少女らしい色を多用した百花模様の着物をお召しになり、女のわたくしですら眩しくて目を細めるほど、それは華やかで愛らしくていらっしゃいました。

そして、どこもかしこも爽やかな風が通り抜け、村中が生き生きとした青葉で飾られている中、和馬さまが笠原村においてになつたのです。そのお姿は大層若々しく、この方は輝いた道を歩むにちがいない。そう思わずにはいられないほど、凜々しくていらっしゃいました。

馬の背から、館の前に立つていらっしゃる白峰家の方がお見えになつたのでしょ。和馬さまは馬から降りられ、会釈をくださいました。

この出来事に田那さまが感心され、この後、和馬さまは白峰家のご協力を得ることがお出来になつたのでござります。

白峰家の協力を得たことは、和馬さまにとつて大きな力となりました。

といいますのも、笠原村における事実上の支配者は白峰家であり、以前のご領主も、領地内のことは全て白峰家に一任されていました。それですと上手くいっていたのです。ですので、和馬さまが新しいご領主とはいえ、村人達は侵入者を迎えるような気分でいました。

しかし、実力者である白峰家当主の力により、和馬さまは新たな支配者と認められることができたのです。

「ねえ、和馬さまって全然威張つていなくて、感じのいい方ね。よかつた」

菊花さまも、和馬さまの親しみやすさを無邪気に喜んでいらっしゃいました。そして村に溶け込めるよう、なにかと心を碎き、一生懸命にお世話をされていました。

だんなさまはもともと大人しいご性質のお方でしたので、和馬さまとの間に権力争いのよつなもも特には起こらず、大変和やかにその夏は過ぎていきました。

けれども、わたくしは不安でした。菊花さまを初めてご覧になつた時の、眩しそうな和馬さまのお顔。

あのよつに美しくて可愛らしい方が、笑顔でお世話をされるのです。

和馬さまが菊花さまに惹かれてしまつのではないか。そう思つておりました。

奥さまも同じことを感じていらしたのでしょうか。肌寒くなる頃から、菊花さまが和馬さまのもとを訪れることに、いい顔はなさらなくなりました。なぜならば、菊花さまには決められた許婚がいました。

けれど、足下が紅葉で染まる頃 とつとつ和馬さまが、菊花さまと結婚したいとだんなさまに話されました。

「ありがたいお話ですが、菊花には許婚がおります」

菊花さまは一人娘のため、今度の冬には婿殿を迎えることになりました。

「その男とは会つたこともないと聞いてこる。なんでもしながへ。どうにかその縁談を断つてくれないか」

「和馬さまのお立場ならば、菊花を側室として召し上げる」ともおできになりますのに、このようにお心を汲していただきま出すことを、まずは御礼申し上げます」

「では……！」

「申し訳ございません。娘のことはお諦め願えませんでしょうか？」

「お父さま！」

「広瀬さまは、誠実で優しいお方でいらっしゃいます。本来ならばこのちりが頭を下げて娘を頼みますのが筋かもしません。広瀬さまが通常のじ領主でいらっしゃるのなら、そのようにいたしました」「何が気に入らないのだ」

「広瀬さまは、これから幾度も戦に赴くお方。命の危険にさらわれる度合には、我ら村の者とは比較になりません。菊花は情の深い娘でござります。いつも広瀬さまの御身を案じ、不安な毎日を過ごすことになります。まして広瀬さまに万が一のことでもありますたら、どれほど打ちひしがれることか。わたくしビもは、そのような娘の姿を見ることがなによりも辛うござります」

「……」

「どうぞ、愚かな親心をお察しぐださい」

広瀬家は橘家の家臣として、討伐隊に加わることが既に決定していたそうです。頭を下げるだんなさまを前に、和馬さまは何もおっしゃいませんでした。ただ拳を握り、唇をかみしめてじりじりしゃいました。

「……」

「菊花さま。そのお荷物は？」

和馬さまが帰られたあと、菊花さまをお慰めするために部屋へ伺いますと、大きな荷物がありました。

「なんでもないわ」

「……和馬さまのじりじり行かれるおつもりですか」

「あたし、和馬を待つていられるわ。和馬のためなら、なんでも我慢できるわ！」

「いけません、菊花さま…」

「どいて、玲子…」

「玲子、手を離しなさい」

わたくしと菊花さまがもみあつていると、静かな声がいたしました。

奥さまのお声でした。

## 第十四話 過去の楔（5）

突然現れた奥さまに、菊花さまとわたくしの動きが止まりました。

「菊花、お座りなさい。玲子、お茶をいれてちょうだい」

「は、はい、ただいま」

わたくしは慌てて湯呑みを用意し、お茶を注ぎました。その間、奥さまも菊花さまも、一言もしゃべりませんでした。

湯気がたちのぼる暖かい湯呑みを両手でくるみ、菊花さまの昂ぶつた感情も少し落ち着かれたのでしょうか。荷物を下に置き、松葉色のお茶を少しずつお飲みになつていらつしゃいました。

「菊花。おまえ達が本気で想いあつていることも、広瀬さまが誠実な方だといつともよく分かっています」

「だったら、あたしを和馬のところにいかせてくださいねでしょ？」

和馬はあたしのために家を捨てると言つてくれたわ」

「落ちつきなさい、菊花。あなたは好きな方と一緒になれれば、たとえ苦労しても幸せかもしれない。けれど、広瀬さまはどうかしら」「え……」

「広瀬さまが家を捨てるというのは、今持つているものを全て捨てるということ。領主といつ地位と広瀬家の未来を捨てるということじよしゅう」

「でも……！」

「今は討伐隊参加準備のために、広瀬家全体が必死になつてゐる時。そんな時に責任放棄した者をこいつよく許してくれるほど、世の中は甘くありませんよ。一瞬の感情の為に行動した広瀬さまを、広瀬家はもう受け入れてくれない可能性だってあります」

「だけど……！」

「よく聞きなさい、菊花。男の方にとつて仕事で成功するといつのは、それは大きな価値を持つものなの。今ここで全てを捨てたら、広瀬さまは一から全てを始めなくてはいけません。広瀬さまのお祖

父さまの代から始まり、広瀬家はここまで大きくなりました。今ここで全てを捨てたら、広瀬さまが今と同じ地位を得る頃には、人生の終盤にかかるといふかもしれないよ。菊花は広瀬さまの側にいれば幸せかもしれないけれど、男の方はそれだけでは足らないものなの。だから、菊花。広瀬さまの将来のために、駆け落ちはいけません。お互いに辛いけれど、広瀬さまのために我慢してちょうだい」奥さまの話を聞いても、菊花さまは何もおっしゃいませんでした。ただ、黙つて涙を流していました。

その後、お一人の間にどのよつた話しあいがあつたのか、わたくしは存じません。ですが、和馬さまは一人残されてしまうかもしない菊花さまのため、菊花さまは和馬さまの将来のため……。お互いがお互いを思いやつたのでしよう。

和馬さまが菊花さまを召し上げることは、ありませんでした。

そして、細雪が舞い散る冬のある日、菊花さまは「結婚されたのです。

その日は朝から大変冷えこんでいました。灰色の雲がどこまでも空を覆い、昏だというのに、座敷には灯りがともされていました。式の間中、菊花さまは一言もお話しになりませんでした。涙をこらえるのに精一杯でいらしたのでしよう。祝いに集まつた人々の喧騒も、違う世界の出来事のように感じていらつしゃるようでした。わたくしはだんなさまに言われ、お祝いの品を和馬さまのお館に届けることになりました。和馬さまはその日、本家で大切な御用がありだといふことで、前の晩からお館を留守にしていらしたのです。

大層いやな役目でございました。

けれど、ご領主の和馬さまを白峰家の婚礼において、ないがしろにできるわけがありません。

事情を知つてゐるわたくしならば、不用意なことはするまい。

だんなさまは、そう思われたのでしょうか。わたくしは祝いの品を持ち、屋敷を出ました。

やはり和馬さまはお留守でいらっしゃいましたが、祝いの品だけを留守居に預け、わたくしは帰路につきました。このように後味の悪いお使いは、初めてでございました。

お屋敷に着く前に、わたくしは裏山にある神社へお参りをいたしました。

菊花さまのお心が、早く安らかになられますように。そしてお壇さまと幸せになれますように。ご

その願いを込めながら、わたくしは手を合わせたのでござります。顔を上げたわたくしは、ある人影に気付きました。それは、ご本家に行かれているはずの和馬さまでした。

すでに雪はやみ、美しい夕焼けが山際に広がっていました。夕空に描かれた緋色の熱情が、和馬さまの苦しみに引き寄せられたのでしようか。

和馬さまの顔は、真っ赤でいらっしゃいました。

そして、いつも携えていらっしゃる刀には、雪がやんだにもかかわらず、柄袋（注1）が被されていました。わたくしの怪訝な視線を感じたのか、和馬さまはこつおつしゃいました。

「うしておけば刀を抜きそつになつても、冷静になれる時間が少しできるだらう?」

わたくしは、何も申し上げることができませんでした。

和馬さまの身の内に宿る激しい感情を、改めて思いしらされたのでござります……。

そんな日々の中、菊花さまはすぐにみじめられました。

和馬さまとの噂のせいか、菊花さまの「夫婦仲は、決して良いとは申せませんでした。

ですが、菊花さまは婿殿と仲良くされようと努力はしていました。やつたのです。しかし、努力だけでは上手くいかないのが、男女の

仲でござります。菊花さまの努力が、かえつて婿殿のお心を傷付けてしまつたのでしょう。お子さまが産まれる頃には、お二人の間にはどうしようもない溝ができていらっしゃいました。

そして原口正造があの事件を起こしたのは、菊花さまの「出産から数カ月後のことでした……。

注1 刀剣の柄を覆う袋。多く鐔<sup>つば</sup>までかけ、雨・雪の日や旅行のときなどに用いた。  
(大辞泉より)

## 第十五話 過去の楔（6）

その年は、いつもよりはるかに多く雨が降りました。重なる大雨に村人の不安が高まつた時、村一番の年寄りでさえ経験したことがないというほどの大嵐がやってきましたのです。

大木をなぎ倒す強い風、膚を破りそうな激しい雨……。

川の水量は恐ろしい勢いで増大し、災厄をふりまこうと舌なめずりをしているかのようでした。

やがてこの濁流は村の全てを飲み込んでしまうかもしれない。

そうなつたら我々はどうなるのだ。

誰も口にはしませんでしたが、皆が同じ不安を抱えておりました。そんな時、雨音の隙間にもぐりこむようにして、鐘の音が鳴り出しました。

川の決壊を知らせる警鐘でした。

もう、なにもかもがお終いだ。我々はこの村と共に滅びるしかないのだ……。

村人達に絶望がかけぬけたその時、村の男たちが集まつた寄り合いの小屋の中で、正造がこう言い出したのです。

これは神の怒りに違いない。神を鎮めなければ、いずれこの村は滅ぼされてしまうだろう。

では、どうすればいいといつのだ。おまえに策でもあるといつのか。

ああ。あるとも。

なんだと！ 早く言つてみろ！

竜年の無垢な赤子を神に捧げ、怒りを鎮めていただくのだ。幸い、長年この付近を守護してきた神社の赤子は、竜年である。神も喜んでお受け取りくださるだろう。

それを聞き、ふらりと立ち上がる男が数名いました。

村人達の精神状態は普通ではありませんでした。いつ雨が止むと

もしれない孤立した村の中、不安にさいなまれた人間が負の感情に支配されていました。

希望を失い、正造の言葉にすがる男達が、他の者の制止もきかず神社へと向かいました。

その時神社には、白峰の方達と数名の年老いた下男しかおりませんでした。若い男達は防波堤を築く手伝いにしてしまっていたため、押し寄せる男たちを止められる者が誰もいなかつたのです。

男達は立ちはだかる下男を鍬で殺し、赤子を抱えて逃げようとするだんなさまと奥さま、それに婿殿までもその手にかけたのです。わたくしは菊花さまと倉の中に入つていたため、難を逃れました。外の騒ぎにわたくし達が気付き、倉から飛び出してみると、男達が赤子を手にして走り去るところでした。

視界も遮るほどの大雨の中、菊花さまは裸足で男達の後を追いました。わたくしも必死に走りました。けれども相手は村の男、複数名。女一人では、あまりに心もとない。わたくしは、全てを諦めかけました。

その時でござります。村の会合に出ていたわたくしの夫が、事の次第をお館にお伝えし、事件を知つた和馬さまが菊花さまのもとに駆けつけてくださつたのです。

和馬さまは菊花さまとわたくしを馬に乗せ、正造等を止めるために供の方達と急がれました。そして崖にいる正造のところにたどり着くと、大声で叱咤なさいました。

けれど正造は薄笑いを浮かべたまま、嵐の中を立つていました。それを見て、やはり正造は白峰家を潰すつもりなのだと、わたくしは確信いたしました。

正造がこのようなことをしでかす予兆はございました。神社の実務をやつてきた正造は、ずっと白峰家の財産を狙つていたのです。確実な手段は菊花さまと結婚することでしたが、温厚なんだんなさま、さすがにそれは許されませんでした。

奥さまは以前から正造の動きに不信感を抱かれ、実の兄上にもじ

相談されていったようです。

その動きを察知した正造は、なんとかして白峰家の実権をのつとろうと画策していたのでしょう。正造はこの災害を、白峰家を葬る最大の機会だと思ったに違ありません。

それにしても、菊花さまの懇願やわたくしの罵りですら、野望を鼓舞する歌声にでも聞こえていたのでしょうか……。正造は恍惚の表情を浮かべていました。場にそぐわないその不気味さに、全員が凍りつきました。

しかし……。

「荒ぶる神よ、無垢な幼子を受け取りたまえ！」

いきなりそう叫んだかと思つと、赤子を乱暴に川へ放り投げたのです。

菊花さまは泣き叫ぶ赤子に、必死で腕を伸ばされました。和馬さまが押さえていなければ、正造もろとも濁流に身を投げかねない勢いでいらっしゃいました。

菊花さまの絶叫、男達の怒声……。

嵐の中ですら容易に聞き取ることのできる罵声が、正造に浴びせられました。しかし、そんなものは正造にとってなんの意味もありません。それどころか、泣き崩れる菊花さまにこう言つたのです。「何をお嘆きになります。これでお一人の邪魔をする者が全て消えたではありませんか。むしろ私に感謝してほしいくらいですな」供の者が止めなければ、和馬さまは正造を斬り殺していたでしょう。

和馬さまは放心状態の菊花さまを、お館に連れて帰られました。おそらく、このまま和馬さまと一緒になるだらう。わたくしも村人も、そう思いました。

正造の言葉は、今思い出しても腹がたちます。ですが、家族を失つた菊花さまにとつて、それが最良の選択であることは確かです。わたくしはそのつもりで、白峰家の整理を始めました。

実際、白峰家のお葬式は和馬さまが出されたようなものでした。

村人たちも、お二人の今後については、もう決定したものと思うようになったのです。

## 第十六話 からまる鎌（1）

やがて村の復興が本格的に始まりました。あのよつなことをしでかしたとはい、村で一番金策に秀でていたのは正造です。和馬さんは正造を資金運用係に任命されました。正造はそらみたことか、と村中に触れ回つておりました。

しかし今にして思えば、あれは和馬さまの仕掛けた罠だったのではないかでしょうか。

お金に汚い正造は、復興資金を横領したのです。和馬さんは正造の全財産を没収し、村から追放いたしました。

村人は誰も同情いたしませんでした。

しかし、正造が追放された翌日のことです。菊花さまのお姿までもが、和馬さまのお館から消えてしましました。

和馬さんは必死に探されました。そして数日後に、白峰家と親交のあつた藤枝さまから、菊花さまを預かつているとの連絡があつたのです。

和馬さんは直ちにそこへ向かわれました。わたくし共は菊花さまをお迎えする準備を整え、お一人のお帰りを待つていました。

けれど、和馬さんはお一人で戻つていらつしゃいました。村人は、和馬さまが白峰家の菊花さまを妻にされ、名実ともにこの村の支配者になるだらうと思つておりましたので、皆驚きましたが、和馬様は淡々とおっしゃいました。

菊花はもうこの村には戻らない。神社は総大社からしかるべき神官にきていただき、村を守つてほしい。

それが伝言だとおっしゃるのみです。

腑に落ちない話でしたが、あのようなことがあつたからにはそれも無理からぬこと。時が経てば菊花さまも落ち着かれるだらうと話し合い、和馬さまに全てをお任せすることになつたのでござります。

その後、わたくしは夫と共に都へと出てまいりました。なかなか

商売がうまくゆかず困っていた時に、正造の新しい奥さんが「主人の同郷なら」と、正造に内緒で助けてくれたのです。正造のことは今でも憎んでおりますが、何も知らない奥さんに罪はなく、また、わたくしどもを助けてくれた恩もあります。今回の事件で動転している奥さんに代わり、わたくしどもがこのお屋敷に伺いましたのは、そういった理由からでございます。

「わたくしが知つておりますのは、ここ今まででござります。わたくしが村を離れた後のお二人については、何も存じません。けれど、菊花さまの」「無事なお姿を拝見できて、本当にようございました。菊花さまのことは、ずっと気掛かりでございましたので」

雪菜はなんと言つていいのか、分からなかつた。

母の静養先だった森代という避暑地で、雪菜は菊花と出合つた。その頃、父と兄が討伐隊に参加していたため、雪菜は毎日神社へ出かけては無事を祈つていた。そこに菊花がお参りに来ていて、雪菜が話しかけたのだ。それが、知り合つたきっかけだつた。

母は病氣で、父と兄は戦に出かけている。

幼い雪菜は不安を抱えながらも、日に日に弱つしていく母を安心させるために、いつも元気なふりをしていた。雪菜が泣ける場所は、菊花のところだけだつた。

じゃあ、菊花は……？

菊花が泣ける場所つてどこだつたんだらつ。ずっと独りで耐えていたんだろうか。あんなに辛い目にあつたのに……。

「すみませんが、原口さんの遺品を見せてもらえますか」

直也の声で、雪菜はハッとした。いつの間にか泣いていたらしい。頬が濡れていて、言葉がとつさに出てこない。

正弘が荷物を開いている間に、直也の指先が雪菜の頬をぬぐう。

「直也……」

直也は袖を持つて、もつ一度雪菜の涙を拭いた。

「そうしていらっしゃいますと、昔の菊花さまと広瀬さまを思い出します……」

玲子の目も潤んでいた。

「ですが、未だにお一人が、一緒になられない理由が、何かあるんでしょうねえ。本当に男女の仲は難しいこと……」

「遺品といつても、こちらへは旅に必要なものしか持つてきておりませんから、こんなものしかありませんが」

正弘が広げた風呂敷には、簡単な日用品と安い脇差が一本あるだけだ。

「脇差に触つてもいいか?」

「どうぞ」

直也が鞘を取り、刃先を眺めてくる。

「ありがとう。使つた跡がないな」

「原口はこういった方面はそつぱりでしたんで、形だけの護身用でしょ?」

「やうりじこな。ああ、門まで一緒にに行ひ。雪菜、悪い。」のま  
ま海神へ帰るから

「ええつ! サっき、夕飯を一緒に食べるつて言つたの? それ  
に、こんな話を聞いても菊花に何も言わないの? 一言くらいい、声  
をかけてあげないの?」

「ごめん、急用ができた

「信じらんない!」

近付いたかと思つと、突き放される。その繰り返しじゃない。

「どうしても確かめたいことがあるんだ」

「もう、いい! 直也の好きにしたら?」

それだけ言つと、雪菜は駆け出して坂道をくだる。

「雪菜!」

後ろから直也の声が聞こえた。

だが、雪菜に足を止めるつもつは、じれつぽちもなかつた。

## 第十七話 からまる鏡（2）

「足の早い娘さんですね」

「追いかけなくてよろしいのですか？」

「いえ、追いかけます。すみませんが、ユーリドリュウと待つていてください」

「わたくし共は別の方に道を聞きますよ。いやいや、若ことはいいですね」

「じゃあ、俺はこれで。時間をとらせてしまって申し訳ありませんでした」

「いいえ、とんでもございません。頑張ってくださいね」

夫婦の励ましに、直也は苦笑いを返す。

急いで道をくだと、雪菜が坂の下で立っていた。隣には泰史がいる。

なんで、あいつが。

雪菜は泰史の袖を掴みながら、一生懸命に何かを話していた。雪菜は意識していないが、あれは甘えていた時によくやる仕草だ。

いきなり泰史がかがんで、雪菜の口もとに耳を近付けた。きっと、雪菜の言葉が聞き取れなかつたのだろう。すぐに姿勢を戻した。だが、雪菜は泰史の袖を離そつとはしない。なおも話し続けている。

「雪菜！」

思った以上に、大声が出てしまつた。

雪菜がびっくりした顔をして、直也を見る。

「雪菜、話をちゃんと聞けよ」

「命令しないでよ。直也に振り回されるのはもう、つらがつ。」

「雪菜！」

「こんな雪菜を見たことがない。

こんなにも全身で拒否されたのは、初めてだつた。

「あたし、菊花のところに行かなきゃ。直也は海神に行くんでしょ。

じゃあ、気を付けてね。さようなら。せら、行くわよ黒川さん  
そう言つて、雪菜は泰史の袖を引っ張つた。

「え？ 僕もですか？」

「当たり前じゃない。惣領の妹姫を一人で歩かせる気？」

「さつき、一人で坂をくだつてきたじゃないですか」

「なんで意地悪ばっかり言うの……！」

「はいはい、分かりましたよ。すみません、水越さん。失礼します

雪菜は直也に背を向けて、早足で歩いていく。

その後ろ姿を見ながら、以前、和馬に言われたことを思い出した。

おまえ、お姫さんの好意に寄りかかり過ぎじゃないのか。

泣き出しそうだった雪菜の顔。

「やつぱり、そうなのかなあ……」

直也は独り言を言いながら、ため息をついた。

「変な意地を張らないほうが、いいと思いますよ」

泰史が、しきりがないな、といった顔をしている。

「意地を張つているんじゃないもん。怒つているんだもん！」

「まあ、ちょうどいいか。これ、あげますよ」

泰史が手渡したのは、「ゆかり神社」と書かれたお守りだった。

「恋愛成就の神社ですよ。これをいつも身につけていると、想う相手と結ばれるそうです」

「……黒川さん、これに願掛けしていたの？ 相手は、どこの誰？」

「違いますよ。これは、雪菜さまのために手に入れたんです。水越さんの気持ちが分からないうち、この前言つていきましたからね」

「わざわざ手に入れてくれたの？ ありがとうございます、黒川さん！」

「いいですか。これはいつも身につけていて下さい」

「うん。わかった」

「そうしないと効かないそうですから」

「うん。じゃあ、そうする」

雪菜はお守りを胸元にいれた。

「これでいい？」

「いいんですけど……。男の前ではそういうことをしない方が、身のためですよ」

「そういうもののなの？ じゃあ、『気をつけるよ』

「ほら、部屋の前に着きましたよ。俺はこれでお役御免ですね」

「あたしから逃げたいように見える……」

「気のせいです」

「そつかなあ」

「かんべんしてくださいよ。俺、すぐに渡部さんと外回りに行かなきゃいけないんですから、『ごねないでくださ』」

「直也も黒川さんも、冷たい……」

「その分、惣領殿が大甘じやないです。これで収支が合いますね」

「雪菜さま、どうなさつたんですか。黒川さんと『』一緒に緒ですか？」

黒川さん、上がってお茶でもいががです？」

青白い顔をした菊花が、雪菜の部屋から顔を出した。

「ここにちは、藤枝さん。ゆっくりしている時間がないので、すみませんが失礼します」

「そうなんですか？ 残念だわ」

泰史は菊花に軽く頭を下げる、足早に去つていった。

「なんだか、皆に冷たくされている気がする」

「なにをおつしゃつしているんですか。気のせいですよ」

雪菜が部屋に入ると、菊花はお茶の用意をしていた。

## 第十八話 からまる鎌（3）

「先ほどは申し訳ありませんでした。あたしつたら、失礼なことを  
「ねえ。菊花と広瀬さんつて……」

菊花は動かしていった手を止める。

「玲子からお聞きになりました？」

「うん……」

菊花の指が茶器から離れた。

「どうしてお互に関係ないふりをしてくるのか、気になりますか  
？」

雪菜は頷く。

「でも、言いたくないなら　」

「……笠原村を出てから、一度だけ広瀬をまと結ばれたことがあります」

「え……」

「幸せでした。ずっと求めていた人の腕の中にいられて、こんな幸  
福があるのだと、あの時に初めて知りました。何もかも忘れて、こ  
の人といたい。本当にそう思つたんです」

「菊花……」

「だけど明け方に、赤ちゃんの泣き声が……」

「赤ちゃん？」

「もしかしたら、仔猫の声だったのかもしれません。でも、その泣  
き声を聞いているうちに、あの子が死んだ時のことだが、あたしの中  
でよみがえってきたんです。家族はあの子を守るうとして、みんな  
死んでしまいました。それなのに、あたしはあの子を守れませんで  
した。そんなあたしが、自分が幸せになろうとしていいのでしょ  
うか。そんなことが許されるのでしょうか？」

「だって、菊花は悪くないじゃない……！」

「たとえそうだとしても、あの子を独りで死なせてしまつたことま

で忘れようとした自分が許せないんです。こんな気持ちのまま、他の人の側にはいられません。私の苦しみをあの人まで伝染すわけにはいきませんから……」

「菊花はそう言つてうつむいた。

「だけど、広瀬さんの気持ちは？」

「……」

「広瀬さんは菊花の気持ちを最優先しただけじゃないの？ 広瀬さんは、今でも菊花のことを忘れていないんじゃないの？ だから誰とも結婚しないんじゃないの？」

「あたしは、あの人辛い思いばかりさせてしまいました。もう、あたしとは関わらないほうがいいんです。それがあの人のためだと

……そう思います」

「でも、それは……！」

雪菜は菊花の哀しそうな顔を見て、それ以上言つのは止めた。だけど、菊花、辛そうだよ。

そんな顔をしてそんなことを言つても、納得できないよ。広瀬さんにも、菊花の無理が伝わっていると思つ。

本当に男女の仲は難しいこと。

あの人言つたことは、本當だ。菊花も広瀬さんも、お互いのことを想い過ぎて、その想いが鎧となり、互いに身動きがとれなくなつていて。

どうしたらいいんだろう。

どうしたら、体から想いの鎧がはずれるんだろう。

雪菜は菊花を見た。

菊花は視線に気付くと小首をかしげ、いつものように微笑いかけた。

それが哀しくて悲しくて、雪菜は唇を震わせた……。

真冬の夜明け前は、全身が悲鳴をあげるほど空気が凍つっていました。湊は焚き火の近く立つていたが、それでも耳が痛くなつてきた。

薄闇の中を、幾つもの影が「う」めいている。吉住が率いる、牛島

洋平班と池野文彦班の男達だ。

「渡部さま。牛島班が揃いました」

「よし。牛島班が追つていた七戸は、荒っぽい男だ。油断をするな  
よ」

「はい」

吉住と洋平は小さい声で話していたが、冴え凍つた氷の刃が余分な音を削ぎ落とし、かえつて声の通りをよくしていた。

先ほど七戸が仲間に会つ、との密告があつた。吉住は彼等を急襲することに決め、牛島班と池野班に招集がかかつたのだ。

洋平と話していた吉住の視線が、湊で止まる。緊張しか「えない

その目付きに、湊は体を固くした。

「若松もいるのか。こういった現場には慣れていないだろ？。大丈夫か？」

「意外と体力がありますので、連れてきたのですが。まるで姫君に対するようなお気の使いようでいらっしゃいますな」

「なにしろ、貴船殿のお気に入りだからな」

「大丈夫です。僕、やれます！」

吉住の言い方に少しムツとして、湊は強く言い返した。

「そうだな。これで手柄をたてたら婚約者も見直して、新婚生活は都で送ることになるかもしけんな。頑張れよ、若松」

「そ……そうですね」

僕が手柄を……。

そうしたら、彼女は喜んでくれるだろ？か。す「い」と言つて誓めてくれるだろ？か……。

「僕、頑張ります！」

「はは、その勢いだ」

「渡部さん、もう出ませんと」

「ああ、わかつた」

洋平が男たちを招集し、吉住の前に立たせる。湊は最後尾に立ち、

吉住の言葉を待つた。

吉住がゆっくりと男たちの前を歩き出す。男たちの間で、緊張と興奮がどぐろを巻く。吉住が足を止めたのは、それらが全員に絡まつた時だった。

「諸君。我々の目的は、この橋に不利益をもたらす者を捕らえ、厳罰を下えることにある。敵に情けをかけてはならんぞ。よいな！」

「はつ！」

「出撃！」

「おおつ！」

男たちの声が、残夜に響く。まだ明け方にもならないこの時間は、闇の名残が色濃く漂う。

それがあてられてしまったのだろうか。

湊は、未だ感じたことのない異様な炎が身の内にくすぐり始めていることに、戸惑いを感じていた。

## 第十九話 落滴（1）

「渡部さん、七戸が現れました」

小声で告げる男の視線の先には、短躯で恰幅のいい男がいた。七戸の前には、背が高く痩せた男が立っている。川沿いに乱立している荷物小屋のひとつに、二人は入つていった。洋平が小屋の窓下にしゃがみ、中をのぞく。湊は小屋の周りを包囲しているため、薄暗い部屋の中がどうなっているのかよく分からなかつたが、洋平は吉住のほうを向くと、小さく頷いた。

吉住が左手を振り、突撃の合図を出す。

今まで息をひそめていた男たちに、突然殺氣が宿つた。皆一言もしゃべらず、それぞれの班長のあとに続いていく。

心臓が鳴つて……。

湊の意識が己の体内に向かつた。

そうか。心臓って、こんなに音が出るものだつたんだ。頭にも腕にも爪先にも、大きな鼓動が伝わってきた。体中が震えている……。

ふと気が付くと、横に泰史がいた。

「黒川さん？」

「冷静になれよ」

それだけ言うと、泰史は先頭にいる吉住のところへ行く。とてもなめらかで、無駄のない動きだ。

「冷静に……。」

それは無理な話だ。凍てつく大気でさえぬくしてしまつような熱気の中にいて、どうして落ち着いていられるだろう。渦巻く熱が湊の鼻孔から入り、心をはやらすのだ。

「七戸雅也！ 橋まで来てもらおう！」

扉の開く音。洋平の太い声。

その声が、湊の体にこもつた熱を上昇させる。

「逃げてください！」

雅也が背の高い男を逃がすため、洋平の前に立ちはだかつた。  
雅也は斬りかかる牛島班の男を蹴り、よろめいた隙にその男の胸  
に刀を刺し、右隣の男が斬りかかっても軽くよけ、背中に短剣を立  
てる。

あつという間に、二人が殺された。

「おまえたちは、背の高い男を捕えろ。あいつは殺すなよ」

吉住が前に出て、雅也を取り囲んでいる男たちに命令する。

「しかし……！」

「いいから、早くしろ…」

「はっ！」

洋平が奥の扉から逃げようとすると男を追つた。湊も慌てて後ろにつく。

走りながら吉住に注意を戻すと、雅也が刀をかまえ直していると

ころだつた。

「大人しく捕まつた方が身のためだぞ」

吉住の言葉など耳に入つていなかのよう、雅也は吉住の動き  
を追つている。

「若松！ 気を散らすな！ きさまはこいつの男に集中しろ…」

「は、はいっ！ すみません！」

そうだ。僕はこの男を捕まえて、そして……。

湊の周囲の男が、じりじりと獲物にじり寄る。  
そう。

彼は獲物なのだ。

誰が捕えるのか、競争が始まつていた。

男たちの殺氣と欲が、小屋いっぱいに充満する。

早くしなくては。

早く踏み込まなくては、手柄を横取りされてしまつ。

僕が……。

僕が行くんだ。

そして、彼女を都に……。

「うわっ！」

湊の隣にいた男が大声を出し、慌てて右方へ飛びのいた。全ての意識を田の前の男に集中していた港は男が倒れてきたことに気がつかず、まともにぶつかってしまった。湊の顔になにかが降りかかる。

「いってえ……」

顔に手をやり掌を見ると、真っ赤に染まっている。床に転がった男、七戸雅也は白田を剥いて、どくどくと血を流していた。まだ温かい血。

雅也の執念を吸い取った赤い液……。

生温かくどりとしたそれは湊の体内に侵入し、頭の中を這いずり回つて中をかきまわし、そして神経に付着した。

「う……わああああっ！」

湊の中で、なにかが千切れで飛んだ。

「ばか、やめる、若松！」

どこからか、声が聞こえた気がする。

「？」

胸に衝撃を感じた。熱く焼けただれるような、強い衝撃……。

「若松！」

「逃げたぞ、追え！」

なんだろう……

周りの声がどんどん遠ざかっていく……。

「馬鹿だな。もう殺られるなんて……」

殺られた……。

ちがう、僕はまだ……

あんたはお調子者だから、本当は都になんて行かせたくないのよ。でも、仕方ないわね……。

僕も本当は離れたくなんかない。

だから、早く都へ呼べるようになるかひ……。誰にも文句を言わせないくひこ、立派になるから……。

しつかりやるのよ。いい?

もう言ひて泣いていたつけ……。僕がいなくなつたら、きみは……。

「……」

「若松?」

「……」  
きみ……は……。

湊の手が、刀から離れた。誰も湊をかえりみることのない喧騒の中で、泰史は湊の両目をそつと閉じてやつた。

「もうこんな時間が」  
気が付くと、朝の光が部屋の中に射しこんでいた。昨夜は雪菜のことや和馬のことが気になつてよく眠れなかつたせいか、少し頭が重い。

喧嘩の後、少し反省した直也は雪菜の部屋まで行つたのだが、新しい警護の青竹晴紀と菊花を連れて、外出してしまつたといつ。雪菜の怒つた顔はよく見るが、泣き出しそうな顔は初めて見た。あの顔が直也の心に棘となつてつき刺さる。

雪菜。

小さい声でその名を呼んでも、元気な返事はかえつてこない……。

「とりあえず、こつちが先だ」

直也は起き上がつて顔を洗い、雪菜の幻影をじうにか振り切つた。そして、和馬の部屋に向かう。

三田玲子から笠原村の話を聞いた直也は、原口の殺人についてひとつの仮説をたてていた。

どうしてもそのことを確認したくて海神に戻ってきたが、和馬は酔って宿舎に帰ってきて、すぐに眠ってしまったと同僚が教えてくれた。

まさか上司をたたき起こすわけにもいかず、直也は仕方なく朝まで待つことにしたのだ。

今度こそ、確かめなくては……！

「広瀬さん、起きていらっしゃいますか

「直也か。空いているぞ」

中へ入ると、和馬が書類をみていた。

## 第一十話 落滴（2）

「もう仕事をしているんですか？」

「ああ。夜中に田が覚めちまたから、仕事をしていたんだ。もう屋敷へ帰れるぞ」

「広瀬さん、話があるんです」

「ん~？ 深刻そうだなあ。お姉さんとの喧嘩の仲裁か？」

「屋敷で三田玲子という人に会いました。藤枝さんの家で働いていた人です」

和馬から、余裕の笑みが消えた。

「……それで？」

「三田さんから笠原村であつたことを全部聞きました。藤枝さんは、白峰という名前だつたんですね。」

「昔のことだ。それが、どうかしたのか」

「单刀直入に言います。広瀬さんは、藤枝さんが原口を殺したと思つていますね」

書類をつかんでいた和馬の指が、机の上に置かれた。

「なにを言つてんだ、いきなり。どうかしているぞ、直也」

「広瀬さんは藤枝さんをかばつてているんです」

「面白いこと言つうなあ。続き、聞かせてもらおうか」

やわらかい口調とは裏腹に、和馬の田付きが剣呑さを増していく。未だかつて直也には向けられたことのない、青い怒り。だが、直也はまつすぐに和馬を見て、その怒りから逃げようとはしなかつた。「原口の死体が発見された日から、広瀬さんが犯人かもしれない、と思つていました。雪菜の部屋で原口への嫌悪をみせていたし、あんな顔あんなことを言つから、もしかしたら、と思つていたんです」

「あんなこと？」

「仕方ないでしょ。天罰とこうやつですよ」

「あれは別にわざとじゃないけどな。思つたことを言つただけだし」「そうかもしません。でも、広瀬さんが原口を嫌う理由も知らなかつたし、それが殺害に結びつくほど激しい嫌悪なのかどうかも分からなかつた。なにがあつたのか尋ねても教えてくれないことは、雰囲気で分かつていました。三田さんの話を聞いたおかげで、やつと答えが出てきたんです」

「それが、さつきの質問か。直也。世の中には、言つていいことと悪いことがあるって知らんのかい？」

「言わなければ、この話は先に進みません」

和馬が腕を組む。その目には、敵に向ける鋭さが浮かんでいた。

「まあ、いい。それで？」

和馬の声に、緊張感が宿つている。追い詰められた時のものではない。攻撃する態勢をとる時の、張り詰めた空氣と一緒にものだ……。

「広瀬さんはあの夜、藤枝さんをかばわなくてはいけないと思つ、なにかを見たんです」

「ちょっと待て。なんでそこに菊 藤枝さんがでてくるんだ？」

昔のことがあつたからといって、俺が彼女をかばつてているといつのは、飛躍しそぎじゃないか？」

「じゃあ、例えば広瀬さんが原口を殺つたとしまじょ。だつたら、なぜ自分が疑われるようなことを言つんです？ 広瀬さんが犯人なら、注意が自分に向かないようにするものじゃありませんか？ 雪菜の部屋でみせた嫌悪感を失敗したと思つて、とりつくるうとするのが普通です。それをしないで、わざわざ自分に注意を向けるようなことを言つとなれば、誰かをかばつてていると思つのが自然でしょ。原口が関係し、広瀬さんがそこまでしようとする人間となれば、藤枝さんしかいないじゃありませんか」

「……」

「最初は、広瀬さんが藤枝さんと共に謀して原口を殺したのかと思いました。だけど、それでは俺達の目を広瀬さんに向けさせた意味が

なくなる。ということは、二人は共犯じゃない。広瀬さんは、藤枝さんをかばわなくてはいけないと思うなにかを見たから、俺と雪菜の注意をわざと自分に向けたんです」「なにかつて？」「なにかつて？」

「藤枝さんが原口と一緒にいる現場とか……」

「直也！」

和馬の大声に、直也は言葉を止めた。けれど、その声に含まれた愁嘆の響きが、それが真実に近いことを直也に確信させた。

「いい加減にしろ！ 今なら何も聞かなかつたことにしてやる。いいか？ この話は、ここまでだ！」

「広瀬さん。原口を殺したのは、藤枝さんじゃありませんよ

「なんだつて……？」

和馬の目が、大きく見開かれた。

## 第一十一話 落滴（3）

「昨日、港を案内した若松から聞いたんです。原口の背中側の肋骨には、ひびがはいつていたそうです。原口は脂肪の多い、中年の男です。華奢な藤枝さんの力では、内臓を通過させて背中側の肋骨にひびをいれるのは困難でしょう。第一、原口が橋の屋敷に来るのを、藤枝さんは知っていたのでしょうか？」

「……」

「原口が来ることを知っていたとしたら、あらかじめ刃物を用意したという可能性も否定できません。でも今の彼女に、辺境の倉庫長である原口のことを知る機会はないと思います。広瀬さんだつて、雪菜の部屋で初めて知ったくらいですから。橋の屋敷で、突然原口を見かけたとしたら、藤枝さんはどんな行動をとると思いますか？」

「……意外と気が強いからな。あとをつけるかもしねんな」

「俺もそう思います。でも藤枝さんは、短刀すら持ち歩く習慣はありません。もし自分の部屋に一本くらい置いてあつたとしても、すぐ取り出せる場所にはしまっていないでしょう。それに男の足に追いつくためには、自分の部屋まで凶器を取りにいく時間はなかつたと思います。おそらく、藤枝さんはなにも持たないまま原口を追つた。原口はなぜか竹林に向かっていく。そこで藤枝さんと原口は対峙した……。なにが起きたのかは藤枝さんに確認するしかありませんが、そこで刃物を持った第三の人間が、原口を殺したのではないでしようか？」

「原口だって、脇差くらい持ち歩くだろつ。菊花がとっさにそれを使つた可能性が残つていてる」

「三田さんの話を聞いた時に、原口の脇差を確認しました。一度も使つた跡はありませんでした」

「……」

「広瀬さん。広瀬さんはあの夜、何を見たんですか？」

「……」

「広瀬さん！」

「……菊花じやないかもしれない……。そうか……」

和馬の手は震えていた。そして、声も上擦っていた  
「やっぱり広瀬さんは、藤枝さんをかばっていたんですね」  
しばらく机の上を見ていた和馬は、やがて低い声で話し始めた。  
ぽつりぽつりと語る和馬の顔には、安堵感しか浮かんでいない。  
いつもどこかに含まれている醒めた笑いは、感じられなかつた。  
藤枝さんと出合つた頃の広瀬さんは、こんな顔だつたのかもし  
れない。

直也は和馬を見て、そう思つた。

「あの夜、名波に乗つてゐる時に、竹林へ向かう原口を見かけた」  
直也はなにひとつ聞き逃すまいと、全神経を話に集中させた。  
「あいつが橋の屋敷にいることに驚いて、名波を馬小屋につないで  
から急いで原口のあとを追つた。すると原口が向かつた竹林から、  
菊花が慌てた様子で走つて出でてきた。俺はとっさに隠れたが、菊花  
がいなくなつてからそこを覗くと、原口が胸を刺されて死んでいた。  
俺はてつきり菊花がやつたのかと思つて、裏の門を開けたんだ」  
「裏の門を？」

「そうだ。血の臭いをかぎつけて野犬がやつてくる。そうすれば、  
原口の死体を食ひ散らかして、傷口も分からなくなるだろ？」  
「そして、不審の目を自分に向けさせた……」

「ああ。惣領殿に呼ばれたときも、菊花の話はいっさい出さなかつ  
た。ただ神社の一家としか言つていない。原口の話をしている時の  
俺が不自然なほど淡々としていることについて、誰か指摘をするか  
と……」

「広瀬さん？」

「いや……。なんでもない。菊花は俺に見られたとは、知らないは  
ずだ。大分慌てていたし、竹林の中は暗かつたからな」

「竹林の中は暗かつた……？」

「ちょっと待ってください。それなら、別の人間が竹林に隠れていることに広瀬さんが気付かなくても、不思議じゃありませんよね」「なんだって？」

「広瀬さんは、藤枝さんのことでかなり動搖していたはずです。普段なら闇夜でも人の気配に気付いたでしょうが、あの夜はそうはいかなかつた」

「おまえ、けつこう言うな」

「茶化さないでください。結局、疑問は残つたままなんです。原口を殺したのは誰なのか。竹林の中でいつたいなにが起きたのか。原口は、橋の広い屋敷に初めて来たにもかかわらず、何故夜になつてから竹林へ向かつたのか」

和馬の表情が、それを聞いて引き締まる。

「菊花に訊いてみよう。それが一番てつとり早い。すぐに屋敷へ戻るぞ」

「はい！」

やはり、犯人は広瀬さんじゃなかつた。

本当によかつた。

その気持ちが、和馬にも通じたのだろう。

「直也」

「はい」

和馬の手が、直也の背中を軽くたたく。

そして……。

ありがとう。

和馬の小さな声が、直也の耳に届いた。

部屋の中で、雪菜は横になつていた。

だるい……。

体が重いなんて、生まれて初めてだ。

「先生」

「大丈夫。たいしたことではありませんよ」

菊花の問いかけに、医者はのんびりと答えた。

「でも、雪菜さまの具合が悪くなるなんて、初めてのことなんですね」「顔色は悪くないですよ。疲れが出たんでしょう。まさか、怪我以外でこじかうのお屋敷へ伺つ」とあるとは、思つてもみませんでしたよ」

そう言つと、医者は声を出して笑つた。

「のんきなことを、おっしゃつていなくていいでください……」

「すみません……」

いつも穏やかな菊花に怒られて、医者が驚いている。

「雪菜さま。青竹さんと黒川さんが心配して、廊下で待つていてるんですね。大丈夫ですと伝えて来ますね」

「黒川さんもいるの?」

「ええ。昨日、雪菜さまが落ち込んでいらっしゃったので、様子をみにきてくれたんですよ。そつしたら、雪菜さまがぐつたりなさつていて。青竹さんが先生のところに使いの者を出そうとしていたら、黒川さんがお医者さまを連れて来てくれたんです。あとでお礼を言つてくださいね」

「いま言つよ。中に入つてもらつて」

「いけません。夜着じやありませんか」

「大丈夫、大丈夫」

「聞こえましたよ。心配いらないみたいですね」

泰史の声が聞こえた。

「あ～、ありがとう、黒川さん。わざわざ寄つてくれたんだね」

「昨日、ちょっと冷たかったかと反省しまして」

「雪菜さまの警護を離れるわけにもいかないから、黒川が来てくれてボクも助かつたよ。使いの者を呼ぶよりも、黒川が行つてくれたほうが早いもんな。あとで改めて……」つわつー

「どうしたの……つて、この足音は……」

「雪菜の具合が悪いとは、まことかー」

屋敷じゅうに響き渡るよつた足音をさせて現れたのは、橘家惣領の将一だった。

「惣領殿、病人のいる部屋では、もつとお静かに」

「び……、病人……」

医者の言葉を聞き、将一は蒼白になる。

「雪菜、いつたいどうしたといつのだ。風邪もひかないおまえなのに、食欲がないほど具合が悪くなるとは」

「わかんない……。ごめんなさい、お兄さま。心配をかけてしまって」

「雪菜……。おまえがこんなにしおらしくなるとは。なにか欲しいものはないのか？ なんでも手にいれてやるぞ」

「ありがとうございます、お兄さま。でも、大丈夫。大したことではないって、お医者さまが言つてたし」

それを聞き、将一は医者を見た。その眼光の鋭さに、医者の顔色が変わる。

「それは確かであろうな」

「は、はい。御婦人によくあります、体調不良ではないかと」「万が一誤診などあつたら、許はせんぞ」

「は、はい」

「お兄さま、落ち着いて。あたし、すぐに良くなるから。ね？」

「いや、無理してはいかん。普段、腹痛すらおこさぬ頑丈な雪菜が、伏せるほど具合が悪いのだ。もしや、都の空氣がおまえにあわぬのだろうか」

「うーん、今更つて気もするけど」

「惣領殿。それでしたらご静養を兼ねて、雪菜さまに山荘へお越しいただいてはいかがでしょ」

泰史の突然の発言に、雪菜は驚いた。

## 第一十一話 落滴（4）

泰史の発言に、将一も意外そうな顔をしている。惣領と妹姫の話に割ってはいる者など、この橋にそはない。

「山荘？ もしや……」

「はい。伊部とう商人から借りております、山麓の山荘でござります」

確かにあの山荘なら女が好きそうな造りだし、静かだからゆっくりできるが

「お兄さま、行かれたことがあるの？」

「あ？ ああ。真砂の帰りにな」

「これから戻る予定になつておりますので、差し支えなければ自分も警護に加わらせていただきます」

「どうする、雪菜」

「だけど、お兄さまがお忙しきのに、あたしだけ山荘でのんびりするのな、ちよつと……」

「そんなことは気にせんでもよい。行つてきなさい」

「いいの？」

「今は山荘に寄る者も少ないのでしょうから、雪菜さまもいわゆつくりできるかと思います。それに女性が必要な物もあらかた揃つてはいるようですが、最小限のお荷物でお越しただけるでしょう」

「女性が必要な物が揃つてはいる……。ふーん……」

雪菜は、将一をじつと見た。

「な、なんだ？ 僕だけではないだ」

「だけではない。つてことは、お兄さまも……」

「おまえは、つまらんことを気にせんでいい。それよつも、早く体を直すことによろしく」

「はーい」

「惣領殿、お邪魔いたします。貴船殿が、小広間までお越しいただ

きたいとのことです

若い男の声が、障子越しに聞こえた。

「なんだ。急用か？」

「はい」

「わかった、すぐに行く。それでは雪菜、気を付けて行って」

「ありがとうございます。良くなつたらすぐに戻るね」

「ああ、待つてこるわ。藤枝もゆつくりしてきなさい」

「ありがとうございます」

菊花は礼を言つと、廊下に出で将一を見送つた。

「雪菜さま。山荘に行くことを、水越さまに伝えましょうか。使いの者を呼びますね」

用事を済ますと、菊花は雪菜の枕元に戻つてきた。

「呼ばなくていいよ」

「え……？」

「昨夜ずっと考えていて、気が付いたの。直也には気になることが沢山あって、あたしのことは後回しになることが多いんだなって。考えてみれば、あたしが直也を追いかけているだけだもんね。あたし、嫌われないうちに少し距離をおこつかなあ、と思つていいのだから、直也には何も言わないでいいよ」

「そんなことあつません。水越さまは、雪菜さまのことをちやんと考えていらっしゃると思います」

「ありがとうございます。でもね、直也はあたしと向き合ひを避けている気がするの。直也のことを諦めたわけじゃないけど、しあうがないもんね」

「雪菜さま……」

「菊花、支度に取りかかってくれる？ あまり時間がないんでしょ

？」

「はい……」

「悪いけどあたし、ちょっと寝るね」

「はー。今はお体を治すことだけを、考えてください。」

「そうだね。早く治さなきや。」

そう言つて、雪菜は田をつぶつた。

だが田を開じると、どうしても直也の姿を思い浮かべてしまつ。直也……。

あふれ出よひとする涙を必死にこらへていると、こいつのまにか、柔らかい手が額におかれていた。

その手は優しくすべるように、何度も雪菜の頭を撫でぐる。子供をあやすように、そつとそつと……。

菊花の優しさが、あたしの中に流れこんでくる……。

雪菜の心が穏やかな喜びでいっぱいになり、身体中が満たされていく。

たかぶりかけた感情が落ち着き、眠りの淵に導かれていく、雪菜の意識。

ふわふわとしたその淵の底で、なにかが暖かい光を放つていた。あれ、なに……？ なんだか、とても懐かしい……。

雪菜はその光に向かい、底へ底へと沈んでいく。身体に触れる淵の水が、雪菜を守りながら光に導いているようだ、とても心地いい。

雪菜は底にたどりつくと、光に両手をのばした。ふにゃりとした軟らかいものが、指先に触れる。

これ、なんだろう……。

雪菜は両腕でそれを抱きしめた。

ふにゃふにゃしていて、とても気持ちがいい……。

「あやつー！」

雪菜が田をつむつて身を委ねていると、突然、それが強い輝きを放ち始めた。

雪菜は慌てて、後ろに下がる。

光のきらめきは少しづつ弱くなり、やがて女の幻影を映し出した。

「え？」

思いがけない幻に、雪菜はそこから動けなくなる。

それは幼い雪菜を膝にのせ、笑いながら髪を結ぶ母の姿だった。

部屋の中には英樹と吉住、それと見覚えのある男が一人いる。

将一と敏郎が部屋に入ると、吉住の後ろに控えていた二人の男が、少し震えた。将一と言葉を交すことなど年に一度あるかないかなので、緊張しているらしい。

「その者たちは確か、牛島洋平と池野文彦と申したな」

惣領に名前を覚えられているとは思つてもみなかつたのだろう。

洋平と文彦は平伏した。

「ところで英樹、一体なに」とだ

「本日未明に、原口の横領の仲間と申していた七戸雅也を、我々が急襲いたしました

英樹の代わりに、吉住が落ち着いた声で報告をする。

「それで？」

「味方に死者三名の損害を出し、七戸雅也も死亡いたしました」

「なに？ 七戸を殺しては意味がないではないか！ 七戸の親玉を探つていたのであろうが！」

声を荒げる将一に、洋平と文彦は身をすくませた。

「殺した理由を申してみよ」

「七戸の抵抗が激しかつたため、捕縛が難しいと判断いたしました」

「俺は五体満足で捕縛しろとは言つていないと、それは理解しているだろうな」

大事な証人を殺したというのに、吉住の落ちつき払つたその態度が、将一の瘤に障る。

「惣領殿、こちらを<sup>かん</sup>覽下せい」

吉住が洋平に合図を送ると、脇に置いてあつた風呂敷が差し出された。洋平が広げると、中には木箱が入っている。

「それがどうした」

「どうぞ、中を<sup>か</sup>確認ください」

箱を開けると、刀身が出てきた。

『大森住人 生野巽』と銘が彫られている。

「この銘は……！」

「ご存知のとおり、これは神原が抱えている刀匠の名前でございます」

長い間富中の警護を預かっていた神原には、刀を鍛える専属の村があった。そこには腕のいい刀匠が何名もあり、人材を欲している橘は、常にその村に注目していたのだ。

この生野巽という人物も、橘が目を付けている刀匠の一人である。「刀の持ち主は、神原忍。神原の中核にはおりませんが、一族の者であることには間違いございません。これがあれば、橘が神原を攻める大きな理由になります」

「これならば、神原が横流しに関わっているという十分な証拠になりますぞ」

敏郎の声もはずんでいた。

「……」

吉住と敏郎の言葉に、将一は考えこむ。

「いかがでございましょう、惣領殿。今こそ憎き神原を討つ機会ではございませんか

「兵を送るのなら、わたしが将になろう」

それまでの沈黙を破り、英樹が言った。

## 第一二三話 落滴（5）

「これは、若松湊を刺した剣だ。私が湊の敵をとつてやらねばならぬ」

「英樹……」

激しい感情を隠さない将一と違い、英樹はいつもなだめ役に回っている。その英樹がこう言つのだ。できれば、英樹の意志を汲んでやりたい。

だが……。

「神原への報復は、先へ見送る」

「惣領殿！」

洋平と文彦が同時に叫んだ。

「惣領殿らしくない」決断でいらっしゃいます。神原が橋をなめてかかつても黙つておられると？」

「渡部、言葉が過ぎるぞ」

敏郎が吉住を睨む。だが、吉住の表情は全く変わらない。

「よい、小早川。皆の不満はもつともだ。だが、よいか。英樹の妹、白華姫は大貴族との縁組がすすみつつある。中級貴族とはいえ古い家柄の神原を討てば、貴族どもの反感を必要以上に買う恐れがある。そこをござり押しできるほど、今の橋に力はない。以上の理由から、神原への報復は先へ見送ることとする」

「しかし……！」

「誤解をするな。神原に何もしないと言つているわけではない。時期をみると言つているのだ。渡部、よくやつた。この刀は有効に使わせてもらつぞ。英樹、その時がきたら、思う存分やれ。それまでは耐えてくれ。よいな」

将一のその言葉が、終了を示していた。

「英樹、何か不満があるならば言つてみやう。無言のままの英樹に、将一が言つてみやう。

「惣領の決定に異議を唱えるつもりはない」

英樹は、それだけ言った。

「分かつていいならいい」

将一が席を立つ。敏郎も立ち上がり、部屋を出ていった。

「おまえ達も朝早くから」苦労だったな。今日は眞寝くらになら許可しよう

「はは。ありがとうございます」

不満そうな顔につくづ笑いをはりつけながら、洋平と文彦も、自分の持ち場へと引き上げていった。

「貴船殿。このままでよろしいのですか」

誰もいなくなつた部屋の中で、吉住の声だけが空気を揺らす。

「またその話か。いい加減にせぬか」

「何度も申し上げます。今回の決定は、貴船殿をないがしろしているとしか思えません」

「渡部、口を慎め」

「惣領殿は貴族を恐れていらっしゃいます。それはこの国で最も尊い御方の御意思が、御自分にないことをして存知だからでしょう。けれども貴船殿は違います。冷静で事の道理をわきまえていらっしゃる貴船殿に、期待を寄せる者も多このです」

「渡部……」

「今こそ長年の物思いに決着をつけられる時ではありませんか。このままでは、若松とて浮かばれません。そう思われませんか」

「……」

「それに神原の歌姫 織音という女性の件をこのままになさるつもりですか」

その名前を耳にし、英樹の表情が変わる。

「どこでその話を知つた」

「『』く限られた者しか存じません。『安心を。ですが、いつ惣領殿の耳に入るか、分かりませんぞ』

「その時は仕方あるまい」

「よろしいのですか。惣領殿が怒りのあまり強硬手段に出でられたら、どうなるおつもりですか」

「将一は嫌がる女に無理強にするような男ではない」

「激情に駆られた男はどうなるか分かりませんぞ。それに、貴船殿を脅しの種に使えば、女も承知するでしょう」

「渡部……！」

「愛しい女が他の男に抱かれてもよいのですか。若松を失つただけでなく、女までも失うかもしれません。貴船殿は、それでも耐えるのですか」

「……」

「『決断を、貴船殿』

自分の心が揺らいでいるからか、それとも思考を止める囁きのせいなのか。

吉住の顔が歪んで見える。そして、織音の泣き顔がそれに重なつた。

泰史が吉住を訪ねると、使いの男が部屋にいた。

「魚沼さまは大変喜んでいらっしゃいまして、渡部さまよりしぐへ伝えてくれと、自分にまで声をかけてくださいました」

「そうか。あの玉は以前からお望みでいらしたからな。『苦労だつた』

男は泰史にも挨拶をして、部屋を出でいった。

「もう贈られたんですか？」

「ああ。今が好機だろ？』

「俺もいい報告があります」

「なんだ」

「雪菜さまを山荘にお連れする」とになりました

吉住の動きが、一瞬止まった。

「そうか。よくやつた」

「渡部さんが嬉しそうなところなんて、初めて見ましたよ」「そんなことはどうでもいい。こんなに上手くこくとはな。やはつ、おまえを誘つたのは、正解だつた」

「ありがとうござます」

「山莊へは、他に誰が行く?」

「青竹さんと藤枝さんです」

「青竹が。大した邪魔にはならん」

「渡部さん」

「なんだ」

「出動前、若松に婚約者のことを見つたのは、わざとですね」「そんなことを聞いて、どうする」

「どうもしません。ただ、知りたいだけです」

「あいつは、無防備すぎて自滅した。それだけのことだ。大事の前だぞ。余計なことに気を取られるな。若松の二の舞になりたいのか」「いいえ」

「俺はまだ用事があるからここに残るが、片付き次第山莊へ向かう。準備は任せたぞ。いいな」

「はい」

泰史の真横を吉住が通り過ぎる。

泰史の背後で、引き戸を閉める音がした。そして、吉住の足音が遠ざかっていく。

「油断するなよ、か」

泰史は周囲の気配をうかがつた。

耳に入つてくるのは、冬の寒さに枝がきしむ音。皮膚に感じるのは、刺すように冷たい冬の息吹だけ。

誰もいないことを確認すると、棚の上から埃のかぶつた箱を取り、机に置いた。埃に指の痕をつけないように、蓋の縁をそつと持ち上げて、中を見る。

「ない……」

ここにあるはずのものが、見当たらない。

誰が移したんだ。

渡部さんか？

その時、泰史の全身が空気の震えを感じ取つた。

「誰だ！」

戸口に駆け寄つて外に飛び出す。

気配は残つていたが、人の姿は消えていた。

「まずいな」

刀にかけた手を下ろしながら肩に力を入れ、泰史は呟いた。

## 第一二三話 落滴(5) (後書き)

あけましておめでと「わいわい」ます。

みなさまの「」が幸を心よりお祈り申し上げます。

さて、突然ですが、しばらぐの間「春隣」の更新を停止させていた  
だきます。

色々と思つゝもあり、このまま話を続けていてもいいものかど  
うか悩みまして、一旦この話から離れることにいたしました。  
プロットは最後までつづってありますし、愛着もある作品なので、  
また書きたいとは思つてゐのですが……。

読者の方には「」迷惑をおかけして、申し訳ありません。なにとぞ「」  
了承いただけますよう、お願い申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7902a/>

---

春隣

2010年10月11日17時28分発行